

徳山高専だより

Tokuyama College of Technology

Tokuyama College of Technology

2005年度 No.59



徳山工業高等専門学校

目次

| | |
|-----------------------------|----|
| 巻頭言 | 1 |
| この動きに注目！ 2005徳山高専十大ニュース | 2 |
| ホームページTop Newsで綴る徳山高専この1年!! | 3 |
| 今年を振り返って... | |
| 国際化 | |
| ・ I S E C 国際会議 | 7 |
| ・ 海外研修 (インターンシップ他) | 14 |
| 地域貢献 | |
| ・ 「周南ツリーまつり」にサプライズ!? | 17 |
| 起業 - 創造力の発信 - | |
| ・ 足技の記録 | 18 |
| ・ 技能五輪全国大会 | 20 |
| ・ お年寄り見守りシステム | 21 |
| ・ 席替えルーレット『どこどこ』 | 21 |
| 就職・進学状況 | 22 |
| 就職・進学試験体験記 | 27 |
| 卒業生だより | 32 |
| 退職者あいさつ | 36 |
| 新任者紹介 | 38 |
| 編集後記 | |

編集後記

今年度、夏の北半球は記録的な猛暑、日本は12月からの大寒波により多くの災害が発生しています。一方、1月の南半球のオーストラリアは45度を越える暑さを記録しました。本誌の巻頭写真は、まさに今年度の異常気象を象徴する、20年ぶりの大雪、23cmの積雪を記録した雪景色の徳山高専を選びました。

「徳山高専だより」も年度版として発行され、この59号で3回を数えます。同時に総合企画室ができ、3年が過ぎたこととなります。

広報活動全体の見直しをする中で、機動的でホットな情報を伝える広報の中心としてホームページを位置づけ、高専だよりは年度の広報のまとめとして発刊することにしています。また、2回の保護者会時には新たにリーフレット「夢ふうせん」を発刊し、タイムリーな話題を「ふうせん」に入れ、ロボコン、JABEE、夢広場、進路支援室、ISEC03を特集記事に取り上げ、保護者への情報発信としました。これらの広報媒体であるホームページは最も機動性を重視し、一方高専だよりは年度の記録的な役割を担い、夢ふうせんはその中間的な機能を持たせながら、それぞれに異なる対象をターゲットに見据え、広報の役割を分担させています。

高専だより59号は、2005年のキーワードであった国際化と起業に関する特集が組まれています。また、今年度で定年とされる和田先生、野中事務部長からも含蓄のある文章を頂いています。これからも徳山高専の活動を情報発信し、また楽しんで頂ける「高専だより」であることを祈念して編集後記とします。

(T . S)

徳山工業高等専門学校 Tokuyama College of Technology

徳山高専だより No.59

発行 総合企画室
所在地 〒745-8585 山口県周南市久米高城3538
TEL (0834)-29-6200(代表)
FAX (0834)-28-7605(代表)
印刷 大村印刷(株)
発行日 2006年(平成18年)2月20日
URL <http://www.tokuyama.ac.jp/>

高城の想いや思い出も
すべて包み込む雪化粧



平成17年12月18日(日)の早朝 撮影：土木建築工学科 河村進一

この動きに注目！ 2005 徳山高専 十大ニュース

1 初めての国際会議を開催

構造工学と建設に関する国際会議（ISEC-03）を、開催した。周南市、徳山大学を始め、地元の団体、ボランティアの方々の協力を得て、大成功であった。



2 海外の大学との学術協定の締結

2月に、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校と、11月に、ニュージーランドのフィティレイア・ポリテクニクと協定を結び、国際交流の基盤を整えた。

3 徳山大学との連携強化

1月に締結した協力協定の下で、単位互換、イベントの共同開催などを進めるとともに、周南“学び”コンソーシアムを設立し、地域ぐるみの連携強化を図った。

4 開発成果の実用化推進

マイクロバブル、竹チップなど教員の開発成果の実用化試験が進展するとともに、足マウスを始め、学生のアイデアの商品化も進んだ。

5 まちづくりへの参加

まちづくりに係る各種審議会に加え、周南市のひと輝きプロジェクトにも多くの教職員が参画するとともに、ツリー祭りなどのイベントで学生が活躍した。



6 コンテストにおける学生の活躍

科学技術論文コンクールにおいて最優秀賞を獲得した他、先端技術大賞、キャンパスベンチャーグランプリなどでも優秀な結果を修めた。

7 スポーツ面での学生の活躍

高等専門学校体育大会において、卓球部、水泳部などが活躍した他、地元の各種駅伝大会における陸上部の活躍、バレーボール部の県大会決勝進出が目立った。



写真提供：(株)新周南新聞社

8 技能五輪への参加

山口県で開催された技能五輪に、学生5人が出場するとともに、県内3高専が協力して、ロボットを主体としたブースを出展した。

9 大山超元校長の叙勲

第3代の校長を務められた大山先生が瑞宝中綬章を受けられ、地元の方々の発起により、叙勲祝賀会が開催された。

10 独立行政法人としての初めての決算

総事業費 12億71百万円の内、国から10億54百万円（83%）、授業料等収入1億64百万円（13%）、外部資金導入54百万円（4%）であった。

ホームページTopNewsで綴る 徳山高専この1年!!

2005.1.31

創造教育発の商品誕生への期待! キャンパスベンチャーグランプリで受賞



学生によるビジネスアイデア提案コンペ「第3回キャンパスベンチャーグランプリCHUGOKU」において、機械制御工学専攻1年兼行秀和さんが「足用マウスの製作・販売」で中国経済産業局長賞を、機械電気工学科5年岡本拓也さんが「乳幼児うつ伏せ寝に関する防止技術」で環境・健康・福祉部門の優秀賞を受賞しました。どちらも創造教育の授業で取り組んだテーマを独自に発展させ特許出願しているアイデアです。今後は商品化や販売を目指すことから、創造教育発の商品が現れるのも間近なようです。

2005.2.8

今度はUCSDと学術交流協定! 秋にはISEC国際会議も開催



徳山高専は、アメリカ・カリフォルニア大学サンディエゴ校エクステンションと学術交流協定書を交わしたことを発表しました。これにより教職員や学生の滞在、教育資料の交換など徳山高専の国際性を高めるための交流が始まります。また、秋には本校で「第3回構造工学と建設に関する国際会議 (ISEC)」が開催され、40カ国から約180人が訪れることも同時に発表されました。これらの取り組みは世界に目を向けるよい機会となることでしょう。

2005.3.7

春本番! 皆の就職活動をバックアップ 進路支援室プログラム稼働開始



目前に迫った就職試験のため4年生、専攻科1年生は大忙しの春休みが始まります。就職希望者は学年末試験終了直後、進路支援プログラムガイダンスに臨みました。ここでは、個人面接対策の講義と履歴書やエントリーシートの書き方講座、模擬面接練習などの個人の希望に応じて提供されるプログラムの説明がありました。これは10月に設置された進路支援室の活動の一つで、4月からは低学年向けプログラムも始まるなど、支援内容はますます充実してゆきます。

2005.3.10

理工系学生科学技術論文コンクールで 機械電気工学科2年生が文部科学大臣賞



第6回理工系学生科学技術論文コンクールにおいて、機械電気工学科2年の高瀬善康君が最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞しました。受賞した「独創技術を育てる2つの“時間”」という論文は、徳山高専に入学してから取り組んだ学内ロボコンや高専ロボコンでのロボットづくり、そして創造演習の授業を通して考えたことをまとめており、実践を踏まえた考察で高い評価を得ました。大学生ばかりの受賞者中で「17歳の入賞」がひとときわ輝いていますね。

2005.4.11

英語の辞書を片手に数学の授業！ フィッシャー先生の講義が始まりました



桜の開花と共に徳山高専も新入生や新しい先生を迎えて新学期が始まりました。そして、新しい授業も始まります。この春、着任したドイツ国籍のフィッシャー・クルト（飛車来人）先生は、日本語も堪能ですが英語で専門科目を講義します。これは、学生の皆さんに実践の場で使える英語力を養ってもらうことを目的に行われるものです。早速、専攻科2年生が電子辞書を片手に工業数学に取り組んでいました。語学力の更なる向上が見込めそうですね。

2005.4.28

学生談話室にキャリアサポートブース登場！ 学生への日常的な進路情報提供



新学期、学生談話室にガラスと木でできたおしゃれな空間が登場しました。壁にCAREER SUPPORT BOOTHとプリントされたこの場所は、学生の皆さんが進路に関する情報をいつでも手に取ることができるように設置されました。求人票や進学情報、各種セミナーやコンテストの募集ポスター、就職情報誌等が置かれ、パソコンで本校の進路情報の検索もできます。進路決定時期だけでなく、低学年から活用して学生生活に役立ててください。

2005.5.26

専攻科1年生27名が3ヶ月のインターンシップへ 事前マナー研修の実施



専攻科1年生はもうすぐ始まる3ヶ月のインターンシップの準備に大忙しです。実習先は山口県内だけでなく、広島、東京やオーストラリアなど学生が自分の進路や目標にあわせて選びました。事前研修として行われた人材派遣会社社長によるビジネスマナー講座では、挨拶の仕方、電話の応対、仕事の指示の受け方、名刺のもらい方など、慣れない動きと言葉に格闘していました。さあ準備万端！これからはじまる新しい体験に期待がふくらみますね。

2005.6.10 - 30

今年もばっちり！お国自慢 高専夢広場「留学生のふるさと展」



徳山中心商店街にある本校サテライト「高専夢広場」で、留学生のふるさと展が開かれています。これは、徳山高専で学ぶ留学生の母国を紹介し、市民との文化交流を図ることを目的にした企画です。今年はマレーシア、ベトナム、ラオス、アルゼンチン、インドネシア、カンボジアの6カ国の紹介。展示期間中の週末は、留学生を囲む懇親会が開かれ、留学生が自分で作った資料を使って楽しいお国自慢を聞かせてくれます。

水泳部団体戦「三連覇」卓球部6年ぶり「三冠達成」

中国地区高専体育大会



水泳部



卓球部

梅雨前線が停滞する大荒れの天候の中、第41回中国地区高専体育大会が行われました。今年は、水泳部が三年連続の団体優勝、卓球部男子がシングルス、ダブルス、団体共に優勝する三冠を勝ち取りました。個人戦でも15の優勝（陸上4種目、卓球2種目、剣道1種目、水泳6種目、テニス2種目）と見事な成果です。8月に行われる全国大会に出場する卓球、バレーの団体戦、個人戦で陸上、卓球、剣道、水泳、テニス、バドミントン計31名の活躍が期待されます。

すみからすみまでキャンパス探検！

中学生のための校内見学会



夏休みの静かなキャンパスが一転し、中学生がぞくぞくと集まってきました。毎年恒例の夏の行事「中学生向け校内見学会」です。見学会は学校紹介ビデオに始まり、多くの紹介展示やCADやLEGO、測量等の体験講座、学生食堂での昼食など42の企画で盛りだくさんの内容。約450名の参加者が校内案内図を手に持ち、各展示で示されるクイズを解きながら校内をすみからすみまで探検しました。写真は企画No.9「のぞいちゃおう校長室」の楽しそうな1ショットです。

この街にあった いいストリートファニチャーは？

商店街で学生作品発表会



徳山駅周辺商店街にある徳山高専サテライト「高専夢広場」で、土木建築工学科5年建築設計演習IIIの授業作品展示＆発表会が行われました。これは、授業で自分たちが考えたアイデアを街の人たちにもみてもらおうと学生が企画したものです。この街に必要な設備を模型と図面、作品紹介ビデオに表現して商店街利用者の人気投票を実施、最終日には審査員を招いて発表会を行いました。夏休み返上の準備とユニークな発想の作品達、若者のパワーが街に元気を与えてくれました。

世界34の国と地域から集まった研究成果！

ISEC-03国際会議の開催



最新の研究成果を議論する場である国際会議が、徳山高専の主催で行われました。これは世界中から約150編の論文が集まって開かれた「第3回構造工学と建設に関する国際会議（ISEC-03）」です。山口県初となった国際学術会議の開催には学術的成果だけでなく、周南市、商工会議所による日本文化体験などのもてなしの成功もありました。一つの会議が周南の街に国際化の一步をもたらししてくれたようです。写真は会議中のCoffee Breakのひとつま。

2005.10.23

中国地区大会でアイデア賞・特別賞のW受賞！

高専ロボコン2005



アイデア対決・全国高専ロボットコンテスト2005中国地区大会で徳山高専Aチーム「モッ！ぴょん」がアイデア賞と特別賞のW受賞となりました。今年は手動ロボットが3種類の障害物を克服し、自動ロボットにつなぐという非常に難しい課題。モッ！ぴょんは唯一「飛んでハードルを越える」アイデアを形にしたロボットで、この果敢なチャレンジが評価されました。惜しくも全国大会出場枠は逃しましたが、困難な課題に取り組む意志の強さに来年への期待がよせられます。

2005.11.20

徳山動物園のアカゲザルに遊具をプレゼント

土木の日コンテスト



今年で6回目を迎える土木の日コンテストが、周南市立徳山動物園で行われました。これは地元の間伐材を使って動物園の動物のために遊具を作るコンテストで、土木建築工学科と土木学会が主催している地域交流事業です。今年の出場チームは、本校の学生や教職員チームに岩国工業高校の学生チームや県土木建築事務所の職員チーム、地域の家族チームと多彩な顔ぶれ。できあがった作品はシーソーや橋、タワーなどサルがよるこびそうなものばかりで審査員も頭を悩ませていました。

2005.12.1

今年は発光ダイオードのTCTツリーがお目見え

周南冬のツリーまつり



この街では毎年12月になると駅前大通りの街路樹が巨大なクリスマスツリーに変身する周南冬のツリーまつりが行われます。今年は例年の電飾に混ざってひときわ目を引く発光ダイオード(LED)のツリーが登場しました。これは、機械電気工学科伊藤研究室の学生6名が製作したプログラム制御でリズムよく点灯する徳山高専オリジナルツリーです。台風で倒れた木の後に植えられたヒマラヤスギは学生達によって7000個のLEDで飾られ、新しい街のシンボルとして輝いています。

2005.12.17

小雪舞う師走のスタート！

第23回徳山高専クラブ対抗駅伝大会



師走に走るの先生ばかりではありません。学生達がクラブの命運をかけて走るのが、毎年12月の恒例行事「クラブ対抗駅伝」です。今年は徳山大学や地元企業が参加して賑やかな駅伝大会となりました。大寒波が到来したこの日、31チームのランナー172名が雪と風にもまれながらたすきをつなぎました。大会の結果は、陸上部が7分のハンデをもとせず、圧倒的強さをみせ野球部の3連覇を破って優勝しました。

国際化

国際会議と国際化



ISEC議長

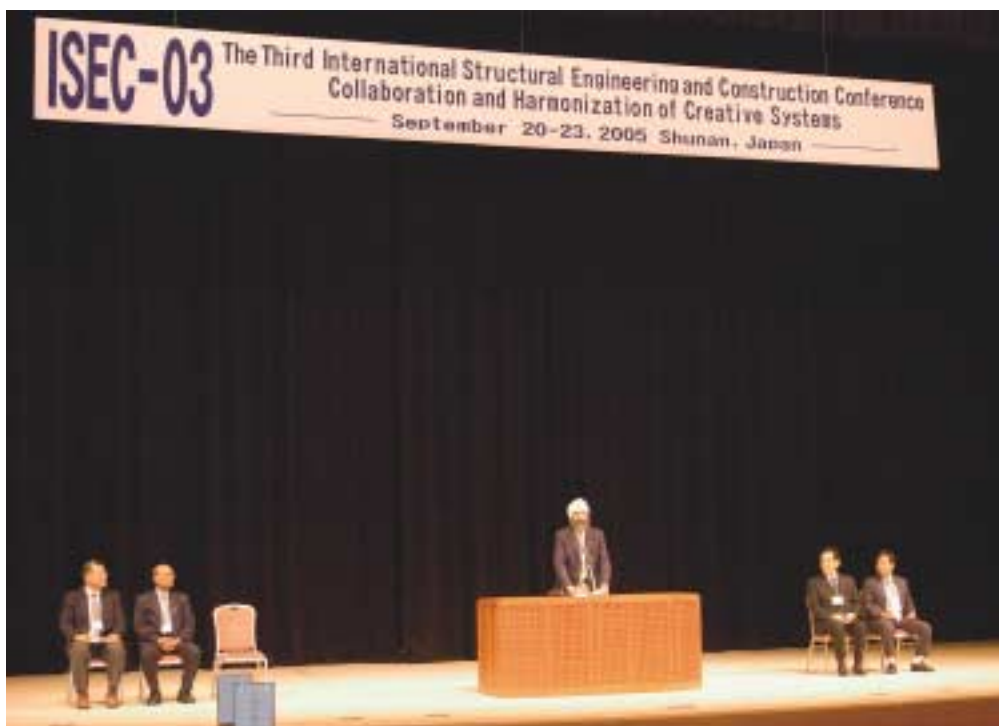
土木建築工学科 教授 原 隆

9月20日～23日、周南市を会場に、ISEC-03 (The 3rd International Structural Engineering and Construction Conference) が開催されました。30カ国約100名の研究者と技術者が周南市に集まり、構造工学と建設に関する会議が行われました。ISECは各年おきに開始されている、構造工学と建設に関する国際会議です。建設は、計画、設計、構造解析、施工、管理、運用などのさまざまな分野(システムといいます)の集合体であり、それぞれが有機的に結びついて、社会に貢献できるシステムになっています。そのため、それぞれの分野で技術革新が行われてきましたが、お互いの分野間での意見交換が重要であり、これを目的にISECは発足しました。ISEC-01(第1回)は2001年ハワイ大学がホストとなって行われました。また、これに引き続いて、2003年にはISEC-02(第2回)がローマ大学で開催されました。そして、ISEC-02で第3回会議を徳山高専がホストになり、周南市での開催が決定されました。開催場所はホ

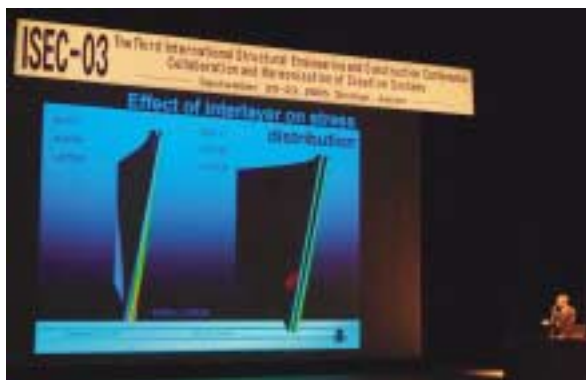
ストに一任となりますので、交通の便のよい福岡、広島を視野に入れていましたが、2003年は周南市合併の年でもあり、2005年の周南市開催を決定しました。2003年9月に行われたISEC-02のバンケットで、次期開催地の紹介をしましたが、周南市という名前が、外国人はもとより、日本人にもほとんど知られていなかったのを覚えています。

ISEC-03の開催につきましては、会議自体の開催は、発表者、司会者、参加者がいれば会場を用意すれば行うことができますので、問題ないと思っていました。幸い、会議場については、徳山大学から提供していただけるということで、ほぼこれらの問題は解決しました。しかし、大勢の外国からのお客さんが会議時間以外の時間をどのようにすごしていただくか、同伴の方や家族の方々に、会議期間中をどのように過ごしていただくかという問題はHospitalityを旨としましたが、手探りの状態が続きました。

この問題に関して、私にとって幸運であったの



は、周南市での開催を決定したことでした。関係者の方々をお願いにあがるたびに、開催のご支援を快く了解いただきました。周南市役所におかれましては、市長自ら音頭をおとりいただき、企画課の皆様を中心に、会議以外のプランをほとんどお引き受けいただきました。また、商工会議所、青年会議所、ロータリークラブはじめ、市内の企業、商店街の皆様、JR、バス、タクシーはじめ交通機関の方々、ボランティアの方々のご協力をいただきました。これらにつきましては、新聞、テレビでご覧になった方も多いと思います。また、商店街や駅の看板など気付かれた方も多かったと思います。これら関係の皆様の暖かいおもてなしとご援助でよい国際会議になったと思います。参加者の方々からも好評でした。今でもお礼のe-mailや写真が届きます。ありがとうございました。



さて、徳山高専の今年のキーワードは「国際化」でした。これは今後も続くでしょう。学生の皆さんは、試験休みということもあって、参加する機会が作れなかったことは残念に思いますが、研究室の学生たちは大いに楽しんで(?)もらったように思います。期待通りあるいは期待以上に活躍してくれました。また、国内外の参加者の方からよい評価をいただきました。大変うれしかったです。これを機に、いままで以上に自信を持って勉強してほしいと思います。彼らのうちの何人かは来年、発表者として国際会議に参加します。

さて、国際会議ですから、参加者の母国語の数で言えば、数え切れない数になります。参加者は、ひとつの共通語「英語」でお互いに意見を交わし、親交を深めました。私は会議の夜、居酒屋の豊の上で、アメリカ、オーストラリア、イラク、中国、リトアニアの方と枝豆を食べながら、日本酒を飲みながら、誰に遠慮もなく、エネルギー資源、国際関係の話をする機会がありました。国どおしではいさかいがあっても、研究者同士分かり合えるという、国際会議ならではの一幕でした。また、彼らは日本の歴史、文化を正しく認識しています。日本のことは学生の皆さんよりよく知っているかもしれません。もちろん、出身国の歴史、文化、問題点をよく知っています。このような人たちと付き合っていくためには英語の勉強だけでは十分ではないことはお分かりでしょう。

学生の皆さんは計り知れない未来があります。専門的な知識を身につけて、英語を勉強して、日本を勉強して、楽しい経験を積んでほしいと願っています。今までの、自分の周りの小さい範囲での知識、習慣で価値判断をするのではなく、地球に日本があって、日本を通じて世界に影響を与えているという意識をもつことが大切だと思います。Think Globally, Act Locally. を頭に入れておきましょう。

末筆になりますが、本会議開催につきましてご協力、ご支援いただきました関係の方々や機関の方々に改めて厚くお礼申し上げます。



ISEC Executive Committee Chair の Amarjit Singh 教授からの手紙

UNIVERSITY OF HAWAII AT MĀNOA

Department of Civil and Environmental Engineering

November 17, 2005

Dr. Professor Takashi Hara
Department of Civil Engineering and Architecture
Tokuyama College of Technology
3538 Kume-Takajo Shunan 745-8585
JAPAN



Dear Professor Hara,

On behalf of the ISEC Executive Committee and all participants in ISEC-03, this is to express our sincere gratitude for an excellent conference.

We were absolutely delighted with every aspect of all conference arrangements. The attention to detail shown by you, your staff, and the College sponsors was most meticulous, and all programs were executed with the utmost of efficiency.

The environment was extremely friendly and cordial. The care and hospitality exhibited by Tokuyama College of Technology and the City of Shunan needs special mention as having been exceptionally extraordinary. Rarely have I seen such enthusiasm by conference staff and the City Mayor to ensure that guests have a pleasant stay.

Without a doubt, your accompanying persons program was most remarkable. The accompanying persons appreciated the itinerary laid out for them, and they expressed immense satisfaction with the arrangements.

You have helped accomplish ISEC's mission. We were impressed with the quality of the Proceedings that will remain a permanent addition to libraries throughout the world. In addition, you have set high quality standards for future ISEC conferences. In doing so, you have raised the standard of conferences worldwide and brought prestige to ISEC. Your President, you, and your staff are to be congratulated for hosting a terrific conference.

Allow us to wish you, your staff, the Tokuyama College of Technology, and the City of Shunan the best for the future.

Sincerely yours,

A handwritten signature in black ink that reads "Amarjit Singh".

Dr. Amarjit Singh, PEng, CEng, FICE, FASCE
Chair, ISEC Executive Committee

Ce. Executive Committee



市長公舎にて挨拶するSinghさん

2540 Dole Street, Holmes Hall 365, Honolulu, Hawaii 96822-2287
Telephone: (808) 526-7550, Facsimile: (808) 956-5014
An Equal Opportunity/Affirmative Action Institution

Hadi先生の徳山高専滞在記

Attending the Conference and Staying in Shunan.

Muhammad N.S. Hadi

Associate Professor, Department of Civil, Mining and Environmental Engineering, University of Wollongong, Australia



Throughout my academic career I have supervised students from many nationalities. In 2005, I had the privilege of supervising a Masters of Engineering student from Japan. This was my first Japanese student. A few months later two undergraduate practicum students from Tokuyama College of Technology undertook research under my supervision. These two students and the postgraduate student did very well in their studies.

During September of 2005, Professor Hara in his capacity as Chairman of ISEC-03 invited me to attend the conference and spend some time at Tokuyama College of Technology. This was my first visit to Japan.

I flew from Sydney to FUKUOKA via CAIRNS. Arrived to Fukuoka where Prof Hara was waiting for me. He was kind enough to take me all the way to Shunan City. During my two week stay in Shunan, Prof Hara and his students looked after me in an excellent and most generous way. I thank them for that.

The conference started one day after my arrival to Shunan. The organisation of the conference was done in a very thoughtful way. All the small details were thought of. The execution of the plans was punctual. There were busses to take the delegates from the different hotels to the conference venue, likewise to the social functions. I would rate this part of the organisation very highly. The conference contained four parallel sessions. The quality of the papers was of very high calibre. I attended a number of the technical sessions and was impressed by the standard of the presentations and the discussions that followed them. Audio-visual equipment were available in the four presentation rooms and at least one assistant was helping the delivery process. All the work was commendable.



During the conference there were coffee and lunch breaks. These were served by professional people. The variety of the food was exceptional, it was designed to cater for so many tastes.

The social programme of the conference was both informative and entertaining. The programme included a visit to the Lord Mayors Residence. Traditional Japanese music was played on traditional musical instruments. The food again included a number of variety dishes. All was very tasteful. A number of successful warming up activities were included. The highlight of the evening was visiting a traditional Japanese house (The Lord Mayor's House) and seeing ladies wearing traditional Japanese clothes. The speeches were informative and to the point. One important point that I have to make is regarding the

politeness and humbleness of our hosts, The Lord and The Lady Mayor. I extend a big Thank You for both of them.

The conference banquet contained some nine courses of high quality food. Again a very well organised event.

During the final day of the conference we were lucky to attend a technical tour. We saw a 20,000 member bridge made of timber with an age of some 500 years. We saw the motorways of Japan as well as the country side. An excellent guide with a young interpreter explained to us the different cultural significant events that have happened in the area. After the bridge we visited a shrine which is located in an island. Most impressive. We then visited Hiroshima. For me this was a very emotional experience.

The three and a half days of the conference were completed without a blemish. A similar feeling was shared among all the participants that I met. A big Thank You to Professor Hara and his team for organising such a successful event where research ideas were presented and exchanged. Such conferences help the advancement of knowledge through bringing together researchers from all over the world.

The following day Prof Hara took us to Kobe and showed us the Kobe Earthquake Museum and the longest suspension bridge in the world. We looked at the effect of earthquakes on people's lives and how to deal with the aftermath of an earthquake and minimise its effects.

On Sunday, two of Prof Hara's students took me to Kyoto. A bigger city with a deep and far culture. They showed me shrines (including the Golden Shrine). The highlight of the trip was the Philosopher's Street. Really there, one would think deeply about life.



The following day Prof Hara showed me Hiroshima. This time in a much slower pace. I saw some real Japanese Gardens that I have seen in the paintings of Monet. A wealth of culture is evident. I also noticed that the variety of food in Hiroshima was different from those at other places. Again an indication of the cultural wealth that Japan offers.

I spent the remaining four days in the College. We had two meetings with the President of the College where we discussed collaboration between the two institutions. The President is most humble and listens to all what is said. I gave a lecture to the final year students and we had a meeting with the academic staff where we discussed methods of teaching used in Wollongong and in the College. All was most impressive. I had discussions with the students undertaking research in the concrete area with Prof Hara. There was a rich exchange of ideas and new research ideas emerged. I was really impressed with the strong floor and strong wall available at Prof Hara's lab.

I noticed that the students were working as a team both in the labs and during the barbeque that they organised for us. It is obvious that collaboration and working as a team is most impressive in a profession like ours. The students performance was most impressive.

On the final day of my stay in Japan, I was fortunate enough to participate in the final year professional experience conference. Students presented their reports in the presence of their academic staff. Most impressive. The quality and professionalism shown by both the students and the staff was of high quality. Posters were also displayed in the especially hired hotel seminar room. At the end of each presentation, there were discussions that students and staff took part of. I noticed that the President and the Former President of the College were actively participating in the discussions. Obviously such a practise will help both students and staff and promote collaboration between all of them.



Next day, Prof Hara took me to FUKUOKA where I flew to Tokyo. Then changed airports and flew direct to Sydney.

My impressions about the parts of Japan that I was fortunate enough to see are: clean, wealth of culture, kind people, generous people, punctual people, humble people, down to earth people, wealth of food... The list can go for ever.

I have to mention my fascination with the train system in Japan.

Finally, I need to mention that I met Prof Hara in an international conference held in Seoul in 1996. At that time, he had brought a number of his students with him to this international conference. I was impressed by the fact that a professor can bring students to an international conference. I mentioned this event to my colleagues in Wollongong.

During my visit to Japan, Prof Hara taught me how to use chopsticks. A most satisfying experience.

One more thing I need to add is Wollongong is similar to Shunan. It is a city surrounded by the sea and the mountains and it has steel works.

To sum up I was most impressed with my experience in Japan and Tokuyama College of Technology. I thank the Lord Mayor, The President of Tokuyama College of Technology and Professor Takashi Hara. I would like to see more collaboration between the the institutions.



市長公舎での歓迎レセプション

驚きの3日間



周南市役所 企画課
藤井 義則

「天野校長、市長公舎で歓迎レセプションをやりましょう！」

河村市長のこの一言が、「ISEC-03」開催に向けてのGOサインでした。

世界各国から周南市に来ていただく方々に、私たちのホスピタリティ（おもてなしの心）を少しでも感じてもらえればという気持ちで、お手伝いしました。

その中でエピソードを少し…。

1日目（オープニングセレモニー）

受付で、高専卒業生（ベトナム人＝日本の大学教授）が論文発表者として来場され、たまたま市でお願いした通訳の女性と数年ぶりに再会。

2日目（レディースツアー、市長公舎レセプション）

漢陽寺や二所神社で、日本人でも難解な説明をいとも簡単に通訳される高専の先生、「さすが」という感じでした。

レセプションで、市長が躊躇なく英語で話しかける姿を見て、「会話には度胸も必要」、また、一緒に食べて飲むことが、いきなりのコミュニケーションを成功させる秘訣ということを実感しました。

なお、当日、外国の方々に欠かせないものは、洋式トイレと椅子でした。

3日目（徳山大学学食での昼食、バンケット）
昼食で、ご婦人がお茶がわりにコーラ（500ml）を3本飲んで、デザートにケーキを数個。（みごとな体型の原因が分かりました。）

バンケットで、アメリカ人（ボストン大学教授）と同席。松井は大リーグで「Very Famous Player」ただし、自分はボストンレッドソックスの熱狂的なファンなので、「大嫌い！」…だそうです。

余談

イタリア人のジャコモと友達になり、バンケットの終了後、居酒屋に。最近、メールで交信中です。ジャコモは、日本の料理はイタリアの味と似て美味しい、女性が若くて（？）綺麗と言っていました。なお、豆腐は苦手でした。

「ISEC-03」を終えて、「やってみること」の大切さ、「やってみたこと」から生まれる自信と誇りを感じています。高専の皆様、また、一緒にやりましょう！

英語は万国共通語！



一般科目 助教授
天内 和人

山口県で初めて開催された学術国際会議であるISEC-03は、国内外からの多数の参加者により盛会のうちに終了し、英語通訳のボランティアとして参加した私も多くの人々とふれあい、楽しい時間を過ごす事が出来た。国際会議であるから参加者は英語圏の国からだけとは限らず、ヨーロッパやアジアの国々からも多くの研究者とその家族が参加していた。そして私にとってこの3日間は、英語が万国共通語である事を改めて実感する良い機会であった。

国際会議に参加する研究者としては英語でのコミュニケーションは出来て当然…しかしながら英会話が不得意な日本人としては、研究者の家族が国際学会に同行し、しかも流暢な英語で異なる国

の人々と会話を楽しむ姿にはいつも驚かされる。ロシア人がネパール人に、また中国人がイスラエル人に自分の国や家族の事を楽しそうに話している。

社会のグローバル化の進展に伴い世界共通のコミュニケーション手段としての「英語」の重要性はますます高まっており、さまざまな方面から、英語教育の充実がたびたび要請されている。その際、教育現場に求められるのは、「実用的な英語」「使える英語」の教育であるが、果たして我々の英語教育の成果はいかに？ 徳山高専の卒業生が、卒業後に国際的人材として活躍出来るようより一層の英語教育の充実を望みたい。

海外研修

オーストラリアでの経験

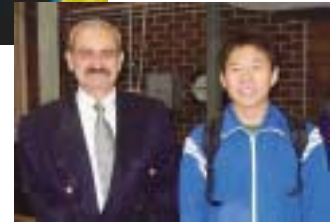
環境建設工学専攻1年

陶山 高資

昨年、北半球のみんなが楽しみにしている季節「夏」を捨て、6月から8月までの3ヶ月間、南半球のオーストラリアで研修を行いました。その時期を今思い出してみても、頭に思い浮かぶものは、海とホームステイ先の家族、学校の友達です。そこで得た、思い出や感動については、言葉で表せないで今回は書きません。そのかわりに、あるオーストラリア人が僕に言った言葉「なぜあなたはそんなに頑張るのか？」について考えたことを書きたいと思います。

オーストラリアでの生活は基本的に研究とジムでの運動でした。もちろん休日は旅行に行ったり、子供と遊んだりもしていましたが、平日はほとんど自分に必要なことと、自分を磨くことに時間を費やしました。自分はインターンとして来ている訳だし、レポートのためもあるため、きちんと生活することは当然だと思っていました。それ以前に、研究やトレーニングに対して志があったため自分を磨く生活を送っているのだと考えていました。だから「なぜそんなに頑張るのか？」と聞かれた時に、それを説明したのですが、相手はなかなか理解してくれませんでした。そもそも「志」に代わる英語がないのです。願望や野心、意志などの英語はありますが、志にぴったりと当てはまる表現がありません。武士の心と書く、志は仏教が根底にある文化独自の表現だろうと思います。

志は誇るべき表現ですが、それが完璧主義につ



Hadi教授と

ながってはいけなから思ふます。完璧主義は、人間関係をギスギスさせますし、完璧な人間は面白みがないと思ひます。また、お金を稼ぐことに志を持つことも人生をつまらないものにするのではないかと思ひます。その辺りは、オーストラリア人と日本人を見比べてよくわかりました。オーストラリアの人達はいつも、これでもかというほどに楽しそうでした。冬でも海沿いのプールで泳ぎますし、休日は決して仕事をしませんが、また、食事も好きなものを好きなだけ食べ、ビールとワインを山ほど飲み、ものすごい量のケチャップを使ひます。文化の違いで片付けられない程に差を感じ、同じ人間なのになぜここまで生活スタイルが違ふのだらうと思ひました。僕はその生活をかなりうらやみ、慌ただしく生活する日本人の中で暮らしていることを悔しく感じました。

志を持つことは必要なことだと思ひますが、自由に楽しむ暮らしに憧れます。帰国後数ヶ月が経ちますが、この葛藤は今も続き、2006年の自分のテーマにもしました。一生懸命生きることに、楽しく生きることに2つを同時に満たし、生活することはできないのでしょうか？生活自体に志を持つこと、そして、楽しく生きることに、楽しんで生きることは違ふというところにヒントがあるように思ひます。

皆さんもぜひオーストラリアに行ってみてください。生活を見直すきっかけになると思ひます。



ブルーマウンテン

『イギリス留学のススメ』

土木建築工学科5年

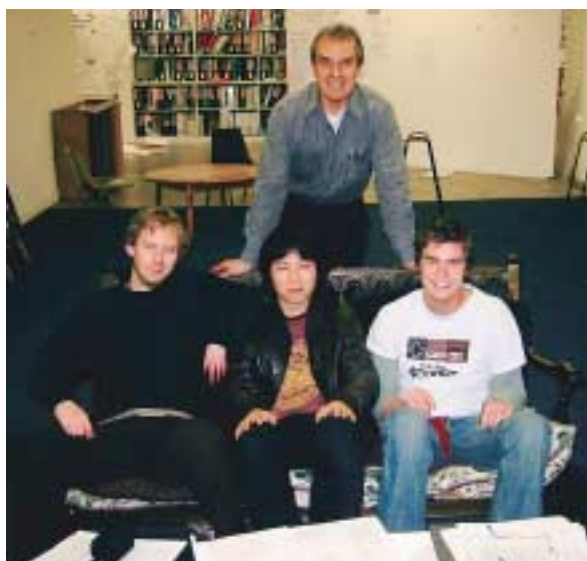
兼重 有佑

今回はイギリスに留学した経験を書いてくれるので「イギリス留学のススメ」と題して海外での生活について経験したことをまとめます。帰国してからだいぶ経つので、自分としてもいろいろ思い出に浸るのにちょうど良い機会です。高専も最近は国際化というのを盛んに言っていますので興味のある人も多いと思います。ロンドンとスコットランドのグラスゴーでの暮らしについて、参考までに海外生活について紹介したいと思います。

きっかけはいろいろありますが、よくテレビでやっている海外旅行番組や日本人が持つ既成観念的な外国人のキャラクターは本当なのか？行って確かめたいという思いがありました。

【ロンドンでの生活】

初めてヒースローの空港に着いた時はもう帰れないでしょうかと思いましたが、いろいろな場所で全く日本と違う風景を目にしているうちに、今日から現実にここで生活していかなければいけないという実感と決意が湧いてきたのを覚えています。ロンドンの北にある語学学校に通い始め、たくさん友達ができました。思い出深いのはイタリア人や南米から来た友達が、よくテムズ川のボートであるラテン人コミュニティーのタンゴに連れて行ってくれた事です。そこのデッキからロ



建築クラスの仲間達

ンドンの夜景が眺められてとてもきれいだったのを思い出します。イギリスではTOEICやTOEFLではなくてIELTSという英語テストが一般的で大学に入学するには必要です。これがなかなか難しくリーディング、リスニング、ライティングそしてスピーキングとてんこ盛りで2日掛かりであります。スランプに陥って悩んだり、イギリスの寒さと暗さで精神的にまいった時期もありましたがなんとか乗り越えました。

【イギリス人とパブ】

イギリスといえばパブです。パブへ行けばイギリスを垣間見ることができます。例えばパブにもいろいろあって、労働者階級のサッカーパブや上流階級向けのちょっとおしゃれなパブ、ミドルクラス向けの味気ないチェーン店まであります（階級の違いはスーパーマーケットでも見られます）。パブは語学の勉強にちょうどいい場所！？で習った単語や文法を実践できます。また、酔っぱらうと適当なことをペラペラ喋れるので暇を見つけてはよく辞書を持って近所のパブに通っていました。よくイギリスは飯が不味いといいますがだいたいはその通りです。ただ移民が多いので本格的な中華やインド料理、トルコ料理など世界中の料理が安く食べられます。日本のレストランは高いです。日本人にとって米や麺がある中華はありがたかったです。



【ヨーロッパ建築の旅】

ヨーロッパはあまり国や国境ということに気にせず移動でき、パスポートも稀に提示を求められますがほとんど必要ありません。EU圏内では飛行機の運賃が極限に安く、200円というのも多いです。ただそれに税金が乗って3000円くらいになりますが、それでも安いです（当然機内では飲み物も出ません）。また、すべての道はローマに通ずというように列車でどこでも行けます。あまり計画を立てずに旅行するタイプなのですが大丈夫でした。深夜に新しい街に着いて宿がなかったり、アルハンブラ宮殿で高熱が出てても精神力で乗りきりました。多くの街を迷いながら駆けずりまわり古い教会から現代建築まで観れたことは良い経験になりました。建築の教科書に載っているような有名建築を目の前にすると意外とたいしたことないと思ったり、不意に出会った建物に感動したりが面白かったです。そこで出会う人たちも親切な人が多かったです（時々襲われそうにもなりましたが走って逃げました）。同じヨーロッパでも風土や国民的な性格が少しずつ異なるのも興味深かったです。



ベルリン ブランデンブルグ門

【グラスゴーでの大学生活】

グラスゴーはちょっと前まで日本ではあまり知られていないスコットランドの古びた工業都市でしたが、サッカーの中村俊輔選手が移籍してから有名になりました。街にはカトリック系とプロテスタント系の住人が同居していてサッカーを通じて戦争をしている様などころです。イングランドからスコットランドに引っ越すというのはある意味海外に引っ越す様なもので、言葉（英語版東北弁）も違い、ナショナリズムが強く仲が悪いです。ロンドンからは列車でひたすら北に向かい終着駅がグラスゴーです。北の果てです。イギリス

ではフラットシェアという海外ドラマでよくあるトイレやバス、キッチンシェアして生活します。部屋探しというのが留学生の大きな壁になります。ここで変な人と同居したり悪質な大家に出会ったりしてトラブルになりますが、私の場合はラッキーでした。エマさんという人と一緒に暮らしたのですが、彼女自身がインドに3年住んでいた経験があり心配しているいろいろと私の面倒をみてくれました。ご飯を作ってくれたり（ベジタリアン）、穴が空いたズボンやボタンを裁縫してくれたり、ピクニックやコンサートなどいろいろなところに連れて行ってくれました。一番助かったのは提出するレポートの文法を毎回チェックしてくれたことです。大学での生活もみんなに助けられてばかりでした。クラスに一人の留学生だったこともあり放課後は映画やパブに誘ってくれました。設計課題で設定されていた海岸沿いの敷地にクラスメートとバスツアーに行った時は面白かったです。チャリティーショップでボランティア活動をしたのも良い経験になりました。

帰国してからもメールや電話で連絡するたびに思い出が蘇ります。特にエマさんとダイニングテーブルで朝まで語り合った日々はとても印象的です。何年後になるか分かりませんがまた会いたいです。留学で英語などがうまくなったとかもありますが一番良かったのは良い友達に出会ったことと、日本についてわかった事です。日本の良いところや悪いところが外国に住んでみて比較できるようになったと感じています。何か質問などあればいつでもどうぞ。



お世話になったエマさんと

地域貢献

「周南ツリーまつり」にサプライズ!?

LEDツリーを飾って「音と光のファンタジー」

機械工作研究室 機械電気工学科5年

石川 純平 河村 知希 竹内 博昭



今年で21回目を迎える「周南冬のツリーまつり」は、12月1日から12月28日までの28日間、開催されました。例年、徳山駅周辺のヒマラヤスギなど約50本の木が合計4万個の電球で飾られ、きれいなことで有名ですが、長年のマンネリに対して「新風を吹き込んで欲しい」という徳山商工会議所からの依頼を受けて、誰もが“驚く”ようなツリーを作ることになりました。このようなイベントに突然参加することには、最初、大きな不安も感じました。

実質1週間のごく短期間で、回路図や電子基盤などの全てをゼロから開発するため、円滑に作業を進める必要がありました。苦労しつつも、研究室メンバー全員の協力によって、点灯式に間に合わせる事ができたのは最大の喜びでした。

製作したLEDツリーは、LEDロープライト（ロープの中にLEDを等間隔に配置した製品）を用いて、高さ約8mのヒマラヤスギに、4色のロープライトを16方位の円錐状に配置しています。その周りには、イルミネーションのオブジェとして、星、ハート、徳山高専を表す「TCT」の文字などが飾られています。これらLEDはPIC（マイコン）制御で様々な点灯パターンが演出可能になっており、徳山駅前の御幸通り（中国新聞社前）に設置されました。12月1日の点灯式以降、数回にわたり、プログラムの更新作業を行い、様々な点灯パターンを市民に楽しんでもらうことができました。今年は雪が多く、極寒の中での凍える作業もありました。最終的にはクリスマスにあわせて、「音と光のファンタジー」と題し、クリスマスソングとイルミネーションの連動も行いました。多くの市民に高専生の技術力をPRするための説明ポスターも作成し、ツリーの前に展示しました。

「ワーきれいね」といって通行人が立ち止まる様子を見てみると、市民に“サプライズ”を提供できたのではないかと喜んでます。

今回、LEDツリーの製作に携わることで、多くの貴重な経験を積むことができました。ツリー企画の打合せ、納期を確認しての部品発注、パケット車での高所作業、新聞・テレビの取材など、日頃できないことまで経験することができ、社会勉強にもなりました。今振り返ると、定期試験中の綱渡り的な作業ではありましたが、無事に完成させることができた達成感と充実感でいっぱいです。3月に卒業することになりますが、高専5年間の集大成として、楽しい思い出となりました。来年以降も地域貢献の一環として、学生や先生方が協力して盛り上がる恒例行事となり、新しい伝統を築いていくことになれば嬉しく思います。

最後になりましたが、この企画の機会を与えて頂いた徳山商工会議所の皆様に感謝します。



点灯式直後の記念写真

起業 - 創造力の発信 -

足技の記録



機械制御工学専攻2年

兼行 秀和

足用マウスのアイデア、思いついた当初はまさかここまで出来てくるとは思いませんでした。発想は本科4年になります。その日は、所属している現代文化研究同好会の話し合いが行われており、確かキーボードから手を離さなくてすむ入力装置の話になっていたかと思います。話し合いの中で、さまざまなアイデアが提案され、検討されていましたが、その中でふと、足だったら入力できるのでは、と思ったのがきっかけでした。

それから試作が始まりました。面白そうなので、まずは先行調査も何もせずに作ってみようと思いました。実はこの時点で類似アイデアが特許として出願されており、もしここで先行調査を行っていたら、その存在によって挫折していたかもしれません。とりあえず作ってみたことが、特許出願可能なアイデアの発想につながったと思っています。先行調査は無駄な開発を行わなくてもすむ利点はありますが、そのアイデアにとらわれ、新しい発想が生まれにくくなる欠点もあるため、難しいところでもあります。

試作にあたり、まずは中古マウスを調達し、スティレンボードと手元にあったマイクロスイッチをぺたぺた・・・と作ってみました。組み立て時間は30分です。ですが、初めは明らかに使えませんでした。製作は足の裏に敷く板のようなイメージ

で作りましたが、細かい動きが出来ません。そこでふと、かかとの下あたりを切って、指先で動かせば軽くなり、摩擦も小さくなるのでは、と、スティレンボードで思いつくまま、計画性もなく作ったのが逆に幸いし、思い立った時には切っていました。

しかし、それが予想以上でした。実はかかとの地面につくと、かかとを軸とした回転運動、指の屈伸などが使える、ということに気が付きました。足先での操作により、ふくらはぎのから上の筋肉の負担が軽くなります。このことは、実は手のマウスも同様です。皆さん、マウスを使うときは手首が机についているのではないのでしょうか？

出願した特許の新規性は、このかかとの着地、指先での操作を実現する構造にあります。この後の調査で、先に試作したスリッパのような形が、先行するアイデアとして出願されていることもわかりました。この特許出願にあたり、少し丁寧に二作目を製作しています。



手作り感あふれる初代（左）と二代目（右：KRYテレビの映像）

出願後、企業への売り込みを始めました。しかし、これが芳しくありません。この間に本科を卒業してしまいました。どうしたものかと困っていると、周南地域地場産業振興センターが支援してくれるとのこと。本格的な試作が始まりました。まずはCADで図面を書いてみて、(下図1・2)専攻科のインターンシップ先でもあった山口県産業技術センターで樹脂モデルを作ってもらいました。その後、樹脂成型を行っている企業に依頼し、本格的に図面を起こしてもらいました。ここで、やはり専門とされる方のノウハウの多さに驚きました。そして粘土模型(3)や、光造形(4)といった手法で試作を進め、昨年春、最終試作まで至りました。この間に日刊工業新聞社主催のキャンパスベンチャーグランプリにも応募し、中国経済産業局長賞をいただきました。



試作が続きます

そして昨年秋、東京ビッグサイトにて開催された国際福祉機器展に出品し、これを機に販売を開始することになりました。「足技」と名づけ、広告も完成しました。東京ビッグサイトでの反響は大きかったと聞いています。またテレビ・新聞にも掲載され、web上でも紹介されたことによって、その知名度は大きくなっていきました。



東京ビッグサイトの展示ブース



足技

「足技」

しかし、販売に至ったからといって、まだ終わったわけではありません。現在では、さらに使いやすく、さらに低価格にすることを目指した「足技」改良版の製作も進んでいますし、先日パテントコンテストで入賞したアイデアも入力装置です。こちらの特許取得、実現に向けて努力したいと思います。

ここまでの経緯は、決してアイデアを思いついただけでは実現することは出来ませんでした。アイデアだけでは、日の目を見ることもなく消えてしまっていたかもしれません。支えてくださった先生方や地場産業振興センター、地元企業の皆様には本当に感謝しています。これからもお世話になるとは思いますが、よろしく願います。



技能五輪全国大会 電子機器組立に出場

情報電子工学科 5年

井上 勇樹 松本 武 向谷 直久 重永 桂佑 吉崎 航



岩手県立産業技術短期大学校で

技能のレベルを表すものとして、厚生労働省関連の中央職業能力開発協会が実施する、技能検定があります。電子機器組立、機械製図、メカトロニクスなど36職種あります。技能五輪は青年技能者の育成を図るために、23才以下の若人がこれらの職種で「技」を競うものです。

平成17年度の技能五輪山口大会を目指して、平成15年の春から、情報電子工学科3年の5人が放課後や夏休みに合宿し、電子機器組立部門の組立練習や理論計算を行ってきました。

平成15年度の新潟大会には井上、松本、向谷君の3名が出場し、ワンチップマイコンPICを使った省エネコントローラの組立や理論計算、試作、測定、修理などに挑みました。

平成16年度の岩手大会は盛岡市で開かれ、重永、吉崎君を加えた5人が出場しました。盛岡市は宮

沢賢治の故郷花巻市のすぐ北にある県庁所在地です。盛岡は北上川の上流に開けた内陸の大きな平野にある町です。組立はPICマイコン16F877と16F776とのマルチプロセッサシステムで、キーボードからの入力をシリアル通信で転送し、液晶ディスプレイに表示するものでした。

今年度は10月29日から3日間、山口市の維新公園で開かれた山口大会へ5人が出場しました。課題が段々高度になり、C言語によるプログラミングとPICへの書込みが加わりました。修理課題ではハノイの塔と言って、5つのリングをポールに積み上げていく装置です。不具合が2カ所設定されており、プログラムの修正と電子部品のフォトカプラの破損を見つけ出し、修理するものでした。吉崎君は2つとも見つけ、修理しました。

電子機器組立部門は、トヨタ、日産、アイシン精機、DENSO、HONDA、日立などが参加し、高校を卒業した後、数年間企業で特訓を受けた人たちとの戦いです。世界大会への出場を目指し、社名を賭けて参加しています。38人中、吉崎君が22位、向谷君が28位と善戦しました。

3年に渡り、高専生活で思い出に残る貴重な体験をしました。それぞれ、岡山大、徳山東芝セラミックス、広島大、日立、千葉大に決まり、将来この経験が役に立つことがあると思います。

(技能五輪担当 重安邦之)



お年寄り見守りシステムと席替えルーレット『どどこ』の商品化

お年寄り見守りシステム

情報電子工学科5年

松本 武 向谷 直久



私達の卒業研究は、昨年度の卒業研究を引き継いだお年寄り見守りシステムの改良と商品化です。

この監視装置は、ADSLを通じてインターネットで、パソコンや携帯電話からお年寄りの安否を

画像で確認することができ、また、メッセージを送ることができます。画像は10万画素で1分間に1画面送られてきます。液晶表示器に表示できる文字数は80文字です。着信があるとブザーで知らせます。パスワードによるアクセス保護もされており、セキュリティの面も考慮されています。

今回苦労した点は、昨年度の卒業研究の引継ぎということで、膨大な量のプログラムソースを理解する点、マイコンにプログラムを転送する時間が2分以上かかり、デバッグに時間がかかる点です。また、実際に製品を作るということは非常に勉強になり、これから社会に出た後に役に立つと思います。見守りシステムがお年寄りの役に立てばと思います。(向谷)

席替えルーレット『どどこ』

情報電子工学科5年

福岡 智佳 弘中 仁子 安光 菜美
金井 美賀 宮崎 亜由美

私たちは、H8マイコンを用いて教室などで席替えを行う装置、席替えルーレット『どどこ』の開発と商品化を行いました。教室・長机・円卓の三つのモードがあり、席の並びを入力してスイッチを押すと、赤と緑のLEDがランダムに点灯して、席順を決めてくれます。もともとこの装置は、四年生のときに創造演習の授業でPICマイコンを使って製作したもので、このときはまだ、教室での席替えにしか対応していませんでした。その後、西京銀行グループが開催した「周南ベンチャー道場」に参加し、教室以外の席替えにも対応させて、商品化に向けて改良を加えていきました。そして今回、電子回路のパターンを起こし、商品化をすることができました。

実際に、自分たちが考え、製作した装置が商品化されたのはとても嬉しいことです。誰にでも使



えるように操作を簡単にしたり、楽しく使えるようにしたりするのはとても大変なことでした。このルーレットを使って、学校での席替えはもちろん、パーティーなどの席替えも、わくわくしながらみんなで楽しく行って欲しいです。(安光)

機 械 電 気 工 学 科

就 職 ・ 進 学 状 況

早期対策と報連相で キャリアアップ



5年担任 機械電気工学科
助教授 兼重 明宏

平成17年度機械電気工学科5年生は47名、就職希望34名、進学希望13名です。全ての学生が希望の進路を獲得できました。

まず、就職状況ですが、団塊の世代の方が定年退職を迎えられる「2007年問題」ということもあり、製造業を中心に、機械や電気だけでなく、鉄鋼、化学、自動車など幅広い業種から450社を超える求人を受けました。中には、複数名の求人という企業もありましたし、海外へ事業を展開する企業もありました。本校の学習教育目標である「世界に通用する技術者」が求められています。

採用担当者の多くは、「社会人としての基本的な資質をもち、基礎学力はもちろんのこと、コミュニケーション能力をもつ人材を望んでいる」と言われます。その点では、適性試験や面接試験が選考の重要な点になっています。また、SPI (Synthetic (総合的な) Personality (個性・性格) Inventory (評価)) 試験を行い、足切りラインとする企業も多く、web上でその試験を事前に行う企業もありました。SPI試験は慣れもありますので、早めの対策が必要です。

採用試験の時期も早くなっています。本年度は、ほとんどの学生が4月中旬に採用選考試験を受けました。前述した通り求人数は多いのですが、自分の志望する業種、職種、勤務地などの条件を挙げると、応募できる企業は限られてきますので、採用条件や採用試験の時期などの情報は事前に入手し、応募には戦略的な対応が必要です。

就職先の決定には、業種、職種、勤務地、将来性など自分のキャリアや適正を考え、企業とのマッチングを考慮する必要があります。進路指導の先生と相談を密に行い、情報を入手することも大切です。自分の将来を考え、会社のホームページの探索や会社訪問(工場見学)などを能動的に行うこと、校外実習(インターンシップ)を通して企業の情報を入手することも一つかも知れません。学校推薦に頼るだけでなく自由応募による就職も視野に入れ、自分を企業へアピールする機会をもつことも肝要かと思います。

一方、進学については、以下に記した通りです。推薦による選考で決まった学生もいますが、一般入試の場合、受験時期などを考えると、一人が受験できる数は多くても3校程度かと思います。就職の場合と同じように、早めに志望校を決め、選考方法などの情報を入手し、試験対策を講じれば希望の進学ができるでしょう。

進学先は、修学環境を変えることのない専攻科への進学もありますが、単に偏差値だけの大学選びでなく、進学後の研究や専門性、自身の将来の方向性なども考えて、進学先を検討すべきかと思います。特に、大学では、進学後の教育内容や就職状況、COE (Centers of Excellence) プログラムの取得など、世界標準の先端的な教育研究を行っている学科、講座、研究室があることなどが参考になると思います。

また、企業奨学金や企業へ就職して進学できる制度をもつ企業もありますので、進学を希望する学生にとっては一つの情報かと思います。

就職・進学ともに、進路指導の先生と報連相(報告、連絡、相談)をしっかりと行って、希望の進路を得ることができるでしょう。卒業後もそれができる人が希望するキャリアを獲得できると思います。卒業後のキャリアアップを期待しています。

就職 : 旭化成、旭興産、出光興産(2名)、王子製紙、花王、カンセツ、協和発酵ケミカル、国立印刷局、JFEスチール、新興ブランテック、中国電力、ディーゼルユナイテッド、テラルキョクトウ、東ソー、東レ、東洋鋼鈹(2名)、トクヤマ(2名)、トヨタ自動車、日揮プロジェクトサービス、日東電工、日本精工、日本ゼオン、富士電機機器制御、マツダ、三浦工業、三菱重工業名古屋航空宇宙システム製作所、三菱電機システムサービス、三菱レイヨン、明治乳業、明電舎、森精機製作所、矢崎総業、リョーセンエンジニアズ

進学 : 徳山高専専攻科(3名)、東京工業大学、山口大学、九州工業大学、豊橋技術科学大学(2名)、大島商船高専専攻科(2名)、麻生工科デザイン専門学校 順不同

情報電子工学科

就職・進学状況

意識を高く、チャレンジの心と
目標を持って日々努力!



5年担任 情報電子工学科
教授 池田 信彦

平成17年度の情報電子工学科の卒業予定者は44名（男子28名、女子16名）です。そのうち、就職予定者は26名、進学予定者は18名です。就職・進学予定先を下表に示します。

今年度の求人状況は、昨年度より50社ほど増加し300社強の求人数でした。2007年からの団塊世代の退職者増加に対応する形で、生産技術系の求人が増えましたが、情報系ではそのような傾向はそれ程感じられませんでした。ただ企業の方との懇談では高専卒の評価が高いことが強く感じられました。しっかり勉強していて技術力も高く、前向きに取り組むところが高く評価されているようです。これも高専卒先輩の努力のおかげだと思います。就職試験は昨年同様4月初旬から開始され、ピークは4月下旬から5月中旬でした。試験内容は一般常識、適性試験に加え、2回の面接試験というのが一般的でした。6月下旬ぐらいまでにはほぼ行き先が決まりました。業種別では約75%が情報・通信系、残り約25%が電気・電子系、地域別では関東・中部地区40%、関西地区10%、中国・九州地区50%となっています。今年度の傾向としては、情報・通信系、中国・九州地区が増えたことが挙げられると思います。また、内定先の約40%が過去入社実績のない、新しい企業であることも今年の特徴です。

進学については、年々門戸が拡大する傾向にあります。今年度の大学等編入試験は6月上旬から

開始され、6月下旬から7月中旬がピークでした。

今年度は就職・進学予定先からも見れるように、名の通った難関企業や大学へ多数合格しました。なぜこのように難関を突破できたかという、次のことが挙げられると思います。

1. 自分の進路に対する意識を高く持ち、目標を持って努力したこと。
2. いろんなことにチャレンジする心を持っていたこと。

進路決定にあたっては、「なぜその企業（大学）を選択するのか、入社（入学）してどのようなことをやりたいのかをよく考えて目標を設定すること」と「それに向けてどのような努力をするのか」が重要だと思います。

学科では、情報処理技術者や工事担任者の資格取得を推奨しています。資格取得に向けた勉強会も実施しています。現5年生の有資格者は情報処理技術者28名、工事担任者13名と過去最高です。資格を持っていることが就職に即有利ということはありませんが、努力の証です。資格そのものというよりも、そのチャレンジの心（前向きの姿勢）が高く評価されると思います。「やろう」という気持ちさえあれば、時間はたっぷりあります。自分の手で希望の進路をつかめるよう、いろんなことにチャレンジ、努力して欲しいと思います。

就職：アトラス情報サービス、出光興産（2名）、インフォコム西日本（2名）、エス・イー・シー・ハイテック、OA研究所、科学情報システムズ、関西電力、国際ソフトウェア、シーアールイー、CSI、システムサービス、セコム、ソニーイーエムシーエス木更津テック、第一コンピュータリソース、デルタ工業、徳山コンピューティングセンター、徳山東芝セラミックス、西日本電信電話、ハイテックシステム、日立製作所、富士ソフトABC、富士通九州システムエンジニアリング

進学：徳山高専専攻科（3名）、東北大学、千葉大学（2名）、愛知県立大学、岡山大学（3名）、広島大学、山口大学、熊本大学、九州工業大学、鹿児島大学、豊橋技術科学大学（2名）、東京高専専攻科
順不同

土木建築工学科

就職・進学状況

あなたの人生、 主役はあなた。



5年担任 土木建築工学科
助教授 渡辺 勝利

今年度の土木建築工学科5年生(以下、CA5)の進路状況については、2006年1月の時点で、40名の内、37名が確定しています。内訳としては、21名が就職(民間17名、公務員4名)、16名が進学となっています。以下、各進路の状況と進路指導の反省、感想等についてお話しします。

民間就職については、企業の求人活動が非常に早まっています。また、バブル崩壊後しばらく求人のなかった大手建設業や新たに大手製造業からも求人がきています。このような求人状況に接し、巷で言われている緩やかな景気の回復や2007年問題への動きがあることを実感しました。早期の求人活動に伴って就職試験も早くなっており、4~5月の間に大半の学生が就職試験を受けています。試験の内容は、適正試験、専門試験、面接試験などが行われています。当然のことですが、実力不足や面接の内容が良くない人は、やはり不採用となっています。とくに面接では、志望動機や学生時代にどんなことに打ち込んできたかが必ず問われますので、それに対する明確な言葉と中身を持っていることが大切です。就職試験が早まる傾向は来年度も続くと思われるので、民間就職希望者は早めに準備する必要があります。また、就職試験に際しては、必ず履歴書あるいは会社が用意したエントリーシートを書かなければなりません。そのとき、資格や特技の欄にいくつか書くことが出来るよう、学生生活を見つめ直すことをお勧めします。

公務員については、国家および地方公務員ともに採用枠が絞られ、競争が激化しています。今年度の公務員希望者は当初8名でしたが、最終的に希望が叶った人は半数になっています。公務員を志望する人には、強い意思を持ち続けること、自分で学習計画を立て、実行できることが不可欠と

思います。これを実践できた学生は、複数の1次試験合格を勝ち得ています。さらに最近では、公務員でも面接がかなり大きなウエイトを占めています。「なぜ公務員になりたいのか」、「公務員になって何をしたいのか」等を自分の言葉で言うことが必要です。公務員の勉強もスタートが早ければそれだけ合格率が上がります。公務員希望者は低学年から勉強を始めることをお勧めします。

進学については、11名が本校専攻科へ、5名が大学へ入学が決定しています。専攻科への進学では8名の学生が推薦を受けました。大学も推薦制度を採用している大学が多く、3名が推薦入学を果たしています。専攻科にしても、大学にしても推薦を受けられるかどうかは、4年生までの成績で決まります。進学希望者で推薦入学を希望する学生は、志望校の推薦基準を確認して早期に対策を練ることが大切です。学力入試では主に、数学、英語、専門科目が出題されますが、ほとんどの場合、過去の問題が公開されていますので、それらをもとに計画的な学習を進めることが必要です。

今年度の進路指導は、例年通り、1年前の4年生のキャリアガイダンスから始まりました。これと同時に、クラスでは進路に関する個人面談を始めましたが、大半の学生は、漠然と進学、就職という大枠でしか捉えておらず、一部の学生には、1年後よりも今をどう過ごすか、という刹那主義的な考えがはびこっているように感じました。このため、将来や進路を考えさせる時間などを作ろうとしましたが、現実の問題への対応に追われ、担任1人の努力の限界を感じました。

予定では3月に40名全員が、それぞれの進路に旅立ちます。私としては、十分な指導が出来ないまま、「時間切れ」あるいは「駆け込み」的な進路の決定もあったと反省しております。しかし、自分の人生の主役は自分であることを自覚して、それぞれの道において奮闘、努力いただきたいと願っております。

最後に、今年度発足した進路支援室からは履歴書の書き方や面接練習など多大なる援助を頂きました。また、野中事務部長、近藤庶務課長には、面接練習を何度も快く引き受けていただきました。ここに記して、心よりお礼申し上げます。

就職 : 浅沼組、アステック入江、大林道路、鹿島クレスウエスト、九州旅客鉄道、五洋建設、シマダ、ダイキン工業、大鉄工業、中国建設弘済会、東亜建設工業、東京ガス、東ソー(3名)、東洋証券、西日本旅客鉄道、沼津市役所、山口県(2名)、陸上自衛隊一般曹候補生

進学 : 徳山高専専攻科(11名)、広島大学、九州工業大学、豊橋技術科学大学(3名) 順不同

機 械 制 御 工 学 専 攻

就 職 ・ 進 学 状 況

競争相手は大学生！
準備は早く、自主的に



機械制御工学専攻幹事
機械電気工学科
助教授 西村 太志

平成17年度機械制御工学専攻の2年生は6名いましたが、今年は全員が大学院へ進学しました。自分の専門に関する知識を深めるとともに、特別研究で行ってきた研究分野でさらに研究を進めたいという考えから進学を希望したものと思われます。そのため、大学を選ぶときも、行っている研究内容をホームページやパンフレットなどで調べ、実際に研究室を見学し自分にあった進路を決定していました。入学試験に関しては推薦入試を実施している大学（平成17年度41大学）と筆記試験を行う大学とありますが、試験の形態に関わらず、全員が目標を持って勉強し、合格しました。

また、本年度は就職した人はいませんでしたが、就職に関しては、専攻科生も大学4年生も全く同じ条件となります。最近では、多くの企業（特に大手企業）が学校推薦ではなく自由応募での採用を増やしてきています。そのような企業では専攻科1年生のうちにホームページで登録し、企業説明会に出席していないと採用試験を受験できないことが多く見られます。そのため就職希望の人は早くから企業を絞り込み、就職活動を始める必要があります。

就職、進学、いずれにしても最後は本人の実力です。専攻科において自分で目標を定め、それに向かって勉強すれば必ず実力がつき、自分の希望する進路に進めると 생각합니다。専攻科生の皆さん、専攻科進学をめざしている皆さん、頑張ってください。

進学：立命館大学大学院、広島大学大学院、九州大学大学院、九州工業大学大学院（3名）
順不同

情 報 電 子 工 学 専 攻

就 職 ・ 進 学 状 況

インターンシップの
経験を土台にして



情報電子工学専攻幹事
情報電子工学科
助教授 原田 徳彦

平成17年度の情報電子工学専攻2年生は4名で、就職希望者3名、進学希望者1名です。

まず、就職状況ですが、専攻科生は大学生と同じく自由応募による選考が主体です。今年度は学校推薦のある企業を探すというより、複数の希望する会社のホームページを見て積極的に説明会へ行くというスタイルが多く見られました。旅費は個人負担となるので、そのための軍資金は準備が必要です。専攻科1年の前期に3ヶ月のインターンシップを経験していたことが目標設定の上でプラスになっていると思います。都会の職場、堅実な会社、夢のある企業、もっと深く研究するための大学院進学など、それぞれの思いの中には必ずインターンシップでの経験があるはずです。

次に進学についてですが、こちらも大学のホームページを見ながらオープンキャンパスへ行くなどの積極的な姿勢が見られます。推薦入試制度を利用すれば、特別に入試のための勉強時間を費やす必要はなく、本校の授業や研究に専念することができます。北陸先端科学技術大学院大学とはインターンシップの学生を受け入れてもらうなど交流が活発になりつつあります。

就職：システムプロ、ソルコム、日立笠戸エンジニアリング
進学：九州工業大学大学院
順不同

環境建設工学専攻

就職・進学状況

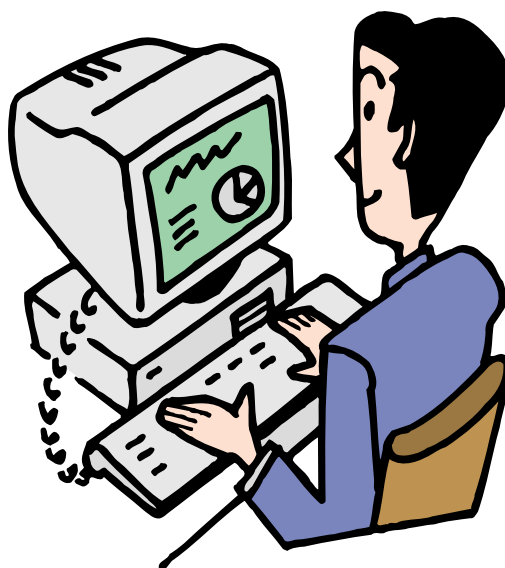
1年生の時から 計画的に



環境建設工学専攻幹事
土木建築工学科
助教授 熊野 稔

17年度の進路状況は、13人のうち民間就職9名、国立大学法人大学院3名、未定1名です。公共事業が少なくなり建設系は厳しいといわれながらも大企業からの求人は選ぶほどあります。民間企業内定は若築建設、前田道路、大阪ガス、東洋鋼鋳、東亜建設工業、東洋建設、中電工、住友不動産などすべて株式上場一部の大企業ばかりです。大学院は豊橋技術科学大学2名と熊本大学を推薦で進学します。

専攻科コースで成功する秘訣はTOEIC400点以上などの修了要件を1年生の時に可能な限りクリアして、2年次には特別研究や進路対策に時間を集中することだと思います。精神的にも2年次に負担が軽くなり、思い切り専門学習と研究に時間がさけます。希望する進路を実現させるためにも自主的に2年間の計画を立てて学習と研究のマネジメントをplan・do・see・checkで行い、計画と実践を効率的に行うことが肝要と考えます。2年の4月から就職戦線は始まるので1年生の時から早目の進路準備が重要です。1年生の時に頑張っとうすごすが2年生の結果になって現れてきます。本科生の方は専攻科コースの進路選択もぜひ検討してください。



就職：大阪ガス、住友不動産、中電工、東亜建設工業、東洋建設、東洋鋼鋳下松工場、前田道路（2名）若築建設

進学：豊橋科学技術大学大学院（2名）
熊本大学大学院 順不同

就職・進学試験体験記



機械電気工学科 5年

児玉 貴紀

これから就職を目指す人へ

私は航空機に関心があったので、就職先は航空関連企業にしようと決めていました。しかし、国内の航空産業は狭く推薦が受けられる企業も整備工場が1つあるだけでした。当初はそこしかないかと妥協していましたが、本心では三菱重工に行きたいと思っていました。その旨を先生に明かしたところ、先生が掛け合って下さり、今年度は特別に三菱重工の名古屋航空宇宙システム製作所に推薦枠を設けて頂けました。これから何十年も仕事をしていく上で、やりたいことがある企業に就職するということは重要なことだと思います。また、他の大手航空関連企業も興味があったので、自由応募で受けてみることにしました。周りはみな大学生ばかりで、私一人だけ取り残されているような錯覚がありました。試験は大学を基準としており、まだ知らないことも多々ありました。幸運にも筆記試験、面接試験ともに合格し内定を頂くことができました。また三菱重工からも内定を頂くことができました。今年度は団塊の世代と呼ばれる方々が退職を迎える時期と言うこともあり、このような幸運に巡り会えたのだと思います。

2社とも内定を頂け、まさに両手に花の状態でした。2社とも行きたい会社でしたが、学校推薦を優先しなければならないので三菱重工へ行くことになりました。しかしながら、仕事の内容を比べてみれば三菱重工の方がより航空事業に携われるので結果的にはそれで良かったのかもしれない。

これから就職試験を受けに行く方へ。これから自分がどんな仕事をしたいのか悩み、就職したいと思うところが複数出てくるかもしれません。就職試験を経験するために2社以上受けてみることも良いですが、何をしたいのかをしっかりと考えてから試験を受けてみて下さい。

(三菱重工業㈱ 名古屋航空宇宙システム製作所)



機械電気工学科 5年

鈴木 剛

編入試験を体験して

私が「高専卒業後の進路についてどうするか」ということを真剣に考える前は、漠然としていましたが、それは就職への道でした。しかし、進路についての話を先生としていくうちに、高専を卒業して就職をすることは、自分にとってあまり良いことではないことが分かりました。そのため、4年生が終わる直前の2月に、進路を「就職」から「進学」にすることに決めました。

このように私は進路を変えたのですが、進学することに決めたからといって、それで大学に編入できるわけではなく、当然、編入試験があります。しかも、その試験のレベルは大抵、高専で学ぶものと同じくらいかそれ以上のものです。だからといって、難しい問題をただ闇雲に解いていけば良いというわけではなく、志望する大学に適した勉強をする必要があるのです。なぜなら、それぞれの大学によって試験に出してくる問題に傾向があり、ある程度の絞ることができるからです。問題の傾向は数年分の「過去問」を見れば判断でき、過去問は徳山高専の学生課にも置いてあるので簡単に手に入ります。過去問を手に入れ、試験の傾向が分かれば、後は勉強するしかありません。最近では編入試験用の問題集もあるので、それを利用すれば効率良く勉強ができます。

私が大学の編入試験を経験して思ったことは、1番大事なものは、ある意味、情報収集だということです。正しい情報を手に入れ、その情報を有効に使えば、編入試験ではかなり優位に立つことが経験して分かりました。

(東京工業大学)

就職・進学試験体験記



情報電子工学科5年
宮崎 亜由美

就職活動を振り返って

私が受けた会社は、大阪のソフト系の会社です。試験は、筆記1回・面接2回・作文と、他に比べて多かったです。筆記試験は、受けると決めてから試験当日までの期間が短かったので、とりあえず一般常識問題の本を書店で購入し、必死で勉強しました。しかし、筆記試験は一般常識のレベルではなく、それよりはるかに難しい問題でした。絶対落ちたと思っていたにも関わらず、無事受かっていました。その後の面接試験に向けて、頑張る準備しました。まず、会社から送られてきたパンフレットをよく読み、経営理念や取り組みなどを理解しました。それと同時に、ホームページにも目を通しました。私たちに求められている理想像や、先輩からのメッセージなど、パンフレットには載っていない情報がたくさんありました。更新されていることもあるので、何度かは見ておくべきだと思います。そして一番効果的だったのが、先生方との模擬面接です。まるで本番のような雰囲気には、意外と緊張するものです。模擬面接を通じて感じたことは、覚えるのでは絶対だめだということです。面接試験時にはとても緊張するので、覚えたことも忘れてしまいそうだし、また、単に覚えただけのことは面接官には分かるものだそうです。だから、無理に覚えるより、素直に答えたほうがいいと思います。実際の面接でも、意外にすんなり答えることができ、面接官と楽しく会話していたようでした。それに、席替えルーレットの商品化や高専祭のロボットなど、真剣に取り組んだことがあったことも大きな自信となりました。何をしましたか？と聞かれて答えられるように、何かに真剣に取り組んでおくことも大切だと思います。

就職試験はそんなに簡単なものではありません。勉強も必要だし、それ以上に精神的につらいことがたくさんあります。けれども、自分に自信を持ち、妥協することなく頑張ってください。陰ながら応援しています。
(アトラス情報サービス㈱)



情報電子工学科5年
蛭浜 康雄

進学をめざす後輩へ

大学受験は思っているよりも、大変なものです。いざ受験勉強を始めても、受験日までに万全といえるほどには勉強できないものです。そのため、あとで後悔をしないように、出来るだけ早く受験勉強を始めたか、授業の内容をしっかりと理解することを勧めます。

僕は受験勉強を始めるのは遅かったのですが、筆記試験で問われる科目が英語と専門知識と、科目数が少ないことに助けられました。しかも、それらの科目というのは僕が一年の頃から興味を持っていた分野でしたので、低学年のうちから関連する授業では、他の人と比べて少し多く勉強していました。元来、勉強が嫌いな僕ですが、その積み重ねのおかげで、勉強の開始時期の遅れを克服することができました。もちろん、このように得意なものだけを問われるというのは滅多になく、数学、英語はもちろん、苦手な教科や、科学や物理といった高学年ではあまり触れないような科目を問う大学もあります。

また、面接試験がある大学を受験する場合には、事前に先生方との模擬練習をすることをお勧めします。僕も先生方と二回練習し、実際に聞かれそうなことに関してのやりとりや、入室後の振る舞い方を教えて頂きました。また、悪い点もその場で指摘・注意して頂いたおかげで、本番でもさほど緊張せずに済みました。

その他にも友達と情報を交換し合ったり、先生方に助言を仰いだりと大切なことはいろいろありますが、一番大切なことは自信をもって受験に臨めるように、後悔しないよう一生懸命頑張ることです。進学を考えている人はこれから大変だとは思いますが、頑張ってください。

(岡山大学)

就職・進学試験体験記



土木建築工学科5年

藤井 睦美

私の就職体験記

私は、もともと地元就職希望で、県外なんて滅相もないといった感じでした。ですが、なかなか地元企業からの求人はなく、来ていた求人もピンとくるものではありませんでした。その頃、クラスのほとんどが受ける企業を決め、就職試験対策を始めていました。それに比べ、何も決めない私に見かねたのか、担任の先生が「東京とかにも目を向けると世界が広がるのに」とおっしゃいました。とても迷いましたが、県外にも目を向けてみる事にしました。

企業への志望理由を人それぞれだとは思いますが、私には表向きの志望理由と本当にその企業を選んだ理由というのがあったのですが、とりあえず、企業を選ぶにあたって、誰もが聞いたことのあるような大きな企業だということ、休みがしっかりしている、給料がそこそこ良いという条件にあてはまるところといったところに決めました。

就職対策として、私は、履歴書、エントリーシート、面接に賭けました。普通なら勉強を頑張るべきかもしれませんが、試験までに時間もなく、中途半端に勉強をするよりも、片方に力を注ぎ込むべきだと思ったのです。そう決めたからには、履歴書などには妥協をしたくなかったので、いろんな先生方のところへ行き、何度も納得のいくまで直しました。

企業によって就職試験対策はかわってくるでしょう。やはり、そこで大切になってくるのは先輩方の情報です。筆記試験である程度ふるいにかけてくる企業もあるだろうし、筆記の試験がSPIとは全く違う企業だってあります。筆記試験よりも、面接重視のところもあると思います。いくら勉強を頑張っても、企業の試験傾向と全く違う事をしていたら、頑張りが報われないこともあるでしょう。私の場合は、本当に運良く、筆記試験はSPIではなかったこと、面接重視だったことで内定をいただくことができました。友人の話を聞いていても、どこの企業も面接はかなり重要な点になってくると思います。面接でしっかりと話すためにはコミュニケーション能力をやしなうこと、面接で話す内容をしっかりとしたものにするのは充実した高専生活を送る事が大切になってくるのではないのでしょうか。

これから就職試験を受けるみなさん、頑張ってくださいね！健闘を祈ります！

(東京ガス(株))



土木建築工学科5年

三吉 亮輔

一先輩の進学への考え

本格的に進学を目標に動き出したのは4年生の後期からです。4年生になり進路を意識し始めたころは、専攻科に入りこれまでの建築に関する知識をより深く勉強してから社会に出たほうが良いのではないかと、ただ漠然と考えていました。それからほどなくインターンシップが行われる時期になり、進学を希望しているという理由から大学へ行きました。そこで行われる専攻科には無い活動や研究を目にし、自分の建築という仕事に対する視野の狭さに気がきました。この出来事を通じ、自分は建築に対する見識をもっと広めるべきだと思い外部の大学への進学を希望するようになりました。高専の専攻科と比較して大学は規模が大きいため、やりたいことの幅が広がります。もしやりたいことが見つからず、将来希望する職種に対する見識を広めたいと思うのであれば、外部の大学は非常に有効な選択肢になると思います。

編入試験に関してはやはり重要なのは過去問になります。大学によって問題の出し方や出題傾向が大きく違うので、過去問をやっていないと本番で問題文の意味が良く把握できなかつたり、勉強していない問題が出ていたりするので、過去3年分ぐらいは必ず目を通しておいたほうがいいです。そこで出来なかった問題は進学担当の先生や専門の先生、先輩などに相談して解けるようにしておくのが重要です。

これから進路に向かって進んでいく皆さんには、今する努力が一番報われると思って、自分の持てる力を存分に発揮し、希望する進路へ進んで欲しいです。

(豊橋技術科学大学)

就職・進学試験体験記



機械制御工学専攻2年

高橋 幸祐

編入生のみなさんへ

私は専攻科生の中で唯一工業高校出身の生徒です。そこで、今回の体験談は編入生を代表して書かせていただきます。

私は、高校生の頃から、将来は宇宙開発の分野で働きたいという夢がありました。そのため、大学院の専攻を選ぶときには、宇宙工学コースやデトネーションエンジンといった推進機器の研究している研究室のある大学院に進学を希望していました。しかし、私の進学試験は挫折の連続でした。まず初めに、7月初旬に九州工業大学大学院の宇宙工学コースを受験しました。事前に研究室訪問をし、研究室の先輩方から面接に関する情報を入手し、自分なりに対策を立てました。試験は面接だけだったのですが、人気のある研究室であったこともあり結果は不合格でした。次に、9月初旬にある広島大学大学院のエネルギー工学コースを受験しました。この時も事前に研究室訪問をし、研究内容はもちろんのこと過去問やその解答など数多くの情報を入手しました。試験勉強は7月の中旬頃から初め、夏休み返上で毎日のように図書館や研究室で試験勉強をしていました。広島大学の試験は数学を含め6科目ありますが、試験内容は本科もしくは専攻科レベルの問題が出ていました。数学など一般教科ではさほど感じませんでしたが、熱力学や流体工学などの専門教科の問題はやはりその大学で教える先生のくせがでているように思えました。これは専攻科の入学試験問題にもいえたことで、教科が同じでも教える先生が違うと出題範囲や形式が少し異なるということがあるので、受験する際には注意が必要です。といいつつも、実は広島大学も落ちてしまいました。「これが編入生の限界なのか!」と思いながら、進学の希望は捨てきれず、背水の陣で受けた九州工業大学大学院の生命体工学研究科に、最後の最後で合格することができました。

最後に編入生のみなさんへ一言。編入したての頃は、周囲の環境に慣れるためにとても苦労すると思いますが、私のように専攻科に進学し、さらに大学院に進学することも可能です。ですから、今後就職もしくは進学を考える際には、最初から無理だと決め付けず何事にも挑戦する気持ちを忘れないでほしいと思います。

(九州工業大学大学院 生命体工学研究科)



情報電子工学専攻2年

常見 正彦

「就職活動体験記～専攻科生の場合」

私が就職活動を始めたのは1年生の12月の中旬からでした。通信関連の企業への就職を希望しており、学校の過去の就職状況を調べていたのですが、自分の思ったような会社は見当たりませんでした。そこで、さまざまな会社の情報を調査し、より自分の希望に合うような企業を探しました。しかし、いずれの会社も学校推薦がなかったため、自由応募で受けることになりました。その結果、大学生と同じような就職活動をすることになり、高専生に比べると随分忙しい就職活動だったように思います。しかしながら、さまざまな会社を見てまわり、また、企業の方々と接することができたことは、自分の視野を広げることにもなり、非常に有意義であったと思います。

また今回、私が就職活動を通じて感じたことは、専攻科の知名度の低さでした。会社説明会や面接に赴いた際には、しばしば「専攻科とはどのようなところですか?」という質問を受けました。高専については知っていても、専攻科はなかなか知られていないのが、現状のようです。ただ、知名度が低いからといって、臆するのではなく、専攻科でしかできない長期インターンシップを始め、学会での発表や授業中での演習等をしっかりとアピールすることができたことが結果としてよかったのだと思います。

専攻科生は大学生と同じ土俵で戦わなければなりません。自分の今後の人生のことなので、業界研究や会社を探すことなど早期から活動を開始し、納得いく結果が出せるように努力することが大事だと思います。この文章が、これから就職活動をされる方に少しでも役に立てば、幸いです。

(株システムプロ)

就職・進学試験体験記



環境建設工学専攻2年

竹林 泰佑

大学院を受験して

私が最初に大学院へ進学したいと考えたのは、本科5年の頃でした。特にたいした理由もなく、ただ漠然とキャンパスライフへの憧れからの希望でした。それから大学院へ進学が決まるまでの間に、私の志望先は公務員や就職など紆余曲折したものの、理想と現実と相談した結果、結局当初の希望どおり進学することにしました。かねてからのキャンパスライフへの憧れがあったのもありますが、その決め手となったのは、自分の興味のある研究があったことです。正直、勉強はもうこれ以上したくないという思いもありましたが、興味のある研究と比べれば、たいした障害ではありませんでした。

進学すると一度決めた後は、興味のある研究に関する論文を読みあさりしました。そして、ついには大学院の先生とアポイントをとり、試験の1ヶ月前に研究室を訪問させていただきました。そのおかげで有意義な情報を得られ、試験に向けモチベーションは一挙に高まりました。その後、試験までは面接や小論文対策に費やしました。そうして迎えた試験でしたが、あまり面接事態の出来は良くなかったものの無事受かることができました。

私の体験からアドバイスをするならば、専攻科から大学院に進学するなら、なるべく早めに大学院の入試情報を集め、特に受験資格や試験日を調べることです。その上で希望する研究室の先生と連絡を取り合い、試験の事前に研究室の訪問ができれば尚良いと思います。熊本大学の場合、推薦入試は小論文と面接でした。小論文は全く予想できないお題が出るので出たところ勝負になってしまいますが、面接は院に対する意気込みを伝えれば良いのではないかと思います。

最後になりますが、一人でも多くの大学院希望者が高専から出れば、私としても嬉しいです。

(熊本大学大学院 自然科学研究科)



卒業生だより



機械電気工学科 第20期卒

北陸先端科学技術大学院大学

知識科学研究科 助手 **杉原 太郎**

この依頼を受けたとき、「やっと終わった」という安堵と、「とうとう終わってしまった」という後悔に似た感慨がない交ぜになった約5年前のことを思い出した。20世紀最後の春に機械制御工学専攻を修了したときのことを。

小学生時代より長い時間を一つの学校で過ごし、部活動の柔道や、機械工学の座学、製図、実験とレポート、本科と専攻科を合わせた3年間での研究、8種類のバイトなど、色々なことを経験してはいたものの、「高専でこれを得た！」という実感は、欠片も持てずにいた。ただ、この7年の間、僕の拙い考えに対して、CAの原先生やMEの山田先生(現大分大)、一般科の国重先生をはじめとする多くの先生が真摯にお答えくださったことで、後ろに戻ってないという実感を得ることができたのは、一握の自信になった。

大学院(京都工芸繊維大)では、ヒューマンインタフェース(HI)という分野の感性情報処理という、情報工学と心理学の中間の研究を本格的に行えることになった。私の希望が叶ったテーマであった。

心理学の実験計画法やプログラミング、統計・多変量解析、HI分野の基礎知識など、高専時代には全く触れなかったことに悪戦苦闘している間に5年間が経過していた。この間は研究に注力しており、研究に必要な外部資金を獲得したり、学会のワークショップでファッションショーを企画したり、パネリストを任されたりする中で、少しず

つ自信が深まっていった。

大学院時代の経験の中で、一つ重要なことに気づいた。自分で考えていたより、「手が動く」ということである。これは、私だけに限ったことではなく、私が在籍した研究室に所属した7人の高専卒業者全てに共通していた(母数が少な過ぎて論拠に値しないとの指摘を受けるかもしれないが)、これは、高専が重視する実験や実習・演習、それに伴うレポートで培われる習性であろう。

「手が動く」のなら、後は「頭」と「目」を鍛えれば良い。自分自身にもそれを課し、後輩たちにも同様に求めた。結果として、後輩たちは自らが望む企業や大学院に進むことができ、私は博士号を得た。

そしてこの春から、私は北陸先端科学技術大学院大学で助手に採用された。現在の専門は技術経営(MOT: Management of Technology)に関わる感性情報処理ということになっている。ついには経営学にも踏み込むことになってしまった。高専時代から考えれば遠くへ来たものだと思うけれども、自分がやりたいことをできる環境にとてもわくわくしている。

最後に、おがましいことは重々承知しているが、先輩かつ大学教員として後輩の皆さんにアドバイスをさせて頂きたい。

5年、あるいは7年かけて一つの専門分野を体系的に学び、「手を動かす」術を身に付けたあなた方は、就職した後の基礎体力は充分である。それに「頭」と「目」を自在に使える力が加われば、どこに行こうとやっていける。例えそれが新しい分野であろうとも。

大学院とは、「自ら問題を設定し、その解決方法を身に付ける」ための組織であるため、それらの力が得られる。同じ専門分野を深掘りするのも良いだろう、分野を変えて新たな視座を得るのも良いだろう。どこの大学院でも良いが、できることならば厳しい環境が良いだろう。経済的に許されるのであれば、失敗することが許される学生の間、この経験をしておくことは非常に有用である。

そして、もし、皆さんのうちのどなたかと一緒に研究できる機会が得られるのなら、それは私にとって何にも替え難い幸せである。



「努力して得られるもの」

情報電子工学専攻科 第1期卒

大島商船高等専門学校 北風 裕教

私は徳山高専専攻科を修了後、大学院を経て、現在は大島商船高専で教員をしております。

徳山高専では専攻科の2年間勉強させて頂きました。現在でも徳山高専の先生方には大変お世話になっています。微力ながら後輩の参考になればと思い、学生時分を思い出しながら、執筆させて頂きました。

【専攻科では】

私は専攻科の1期生ということもあり、多くの先生方から期待されていたようで、毎日山のようなレポートと授業の予習・復習を課せられ、勉強と研究に追われた日々がとても印象に残っております。当時は、学位授与機構の定めた基準をクリアするために他大学の単位を修得する必要もあり、科目履修生として放送大学と徳山大学に席を置き、学校の掛持ちで単位を取得しました。今思うと専攻科1期生というプライドで頑張れたのだと思います。

【目標を持つこと】

将来、映画監督か研究者になりたいという夢がありました。映画監督と研究者では全く違うように感じるかもしれませんが、単純に、「死ぬまでに誰も作れない作品を残すことができる」という点で共通していると思います。映画監督としては芸術的センスに明るくなかったのが、現実的に企業の研究員になって自分のやりたい研究に没頭できる日が来ることを夢見ていました。その夢に近づくきっかけを与えて下さったのが、特別研究で私

を担当して下さった池田信彦先生です。いつも熱心に指導して下さい、私が考えた分析手法について夜遅くまで検討して下さいました。問題点の改善方法をめぐっては、色々とアイデアを頂き、時には喧嘩のような討論をしたこともありました。今思えば、試行錯誤の末に、ようやく思い通りの結果が出た専攻科2年の夏が、目標に夢に向かっての「始めの一歩」だったのかもしれませんが。

【夢に向かって】

現在は、バイオインフォマティクスの研究を行っております。これは、生命科学と情報工学を融合した学問分野であり、コンピュータを用いて遺伝子間の相互作用などの解析を行うことを目的としています。特に私は癌細胞の分析に興味があり、昨年度から山口大学医学部で培養された癌細胞のサンプルデータを頂き、遺伝子の細胞周期に着目した癌細胞の分類に力を注いでおります。このような研究ができるのも、夢を叶えるために様々な先生を始め、多くの仲間に支えられたからだだと思います。私も現在は研究生を受け持ち、学生を指導する立場になりました。学生への指導方法についても私が徳山高専で指導を受けたように親身になって学生へ接するように心がけています。高専生のみなさん、将来の目標を定めて夢に向かって精進すれば、きっと夢に近づけます。徳山高専の先生方は生涯を通してあなた方の力になって下さると思います。私も心から皆さんを応援致します。目標に向かって頑張ってください。



卒業研究生との写真

12月に行われた国際会議（GIW2005）のソフトウェアデモンストレーション部門で卒研学生が発表しました。背景のポスターはその際に展示したものです。

卒業生だより



「変化の中で」

土木建築工学科 第12期卒

新光産業株式会社 営業本部 土木主任

相田 雄治

【はじめに】

まずは高専時代に私を何とか卒業させ、社会に適應できる人間に育てて頂いた、先生方と両親に良い機会なので感謝の気持ちを込めてお礼を申し上げます。

ぼちぼち中年の仲間入りをしてきている私ですが、この年になり最近よく高専に通わせてもらっています。何故通っているかは後で述べさせていただきますが、それより久しぶりに行った高専が変化している事に驚きました。昔も忙しかった先生方ですが、それ以上にともかく忙しく活気がありました。国立から法人に変わった理由もありましたが、早い時代の変化に対応して行く技術者を社会に送り出す為、必至で先生自身も変わろうとし、また学校社会の中で徳山高専の地位を少しでも向上させようとしているように私の目には映りました。OBとしてそのような先生方を誇りに思いました尊敬しています。

【高専時代】

当時を思い出しますと、私は推薦で高専に入学したにも拘わらず遊んでばかりで、2年生の終わりまで10番以内だった成績も見る見る落ちて行き、あるいは留年・退学まで行きました。

そんな時、同級生にこんな学生がいました。3年間成績は後ろからいつも2・3番目で、毎年3月に留年かと言われていました。しかし3年生の後半から先生の粘りの説得もあり、毎日学校に残

り夜中まで猛烈に勉強し自分を変えました。結果、それから卒業するまで成績はクラスの1・2番になり国立大学に編入、大学院まで卒業し今では大手企業にて研究畑で活躍しています。

この2人のケースを見比べると明らかに違います。何が違うのでしょうか？私はそこに「自分を変えたい気持ちの強さ、それを起こす行動力」が違っていただのではないかと思います。私も当時、このままではいけないと気づいていましたが、それを行動に起こす意志が弱かったのだと思います。今になっては短い快樂に吞まれ、長い後悔になってしまったと反省している次第です。

自分のような学生が今の高専にもいるはずですが、保護者の方また先生方この私のような学生に諦めず粘り強く声を掛けてあげて下さい。高専に入学した学生は同じ底力を皆、持っていると感じているからです。私も12歳の子供を持つ親として自身にも言い聞かせ子供に接して行こうと思います。

【ゼネコンにて】

卒業後、中堅のゼネコンに進み、東京 熊本 福岡 大阪と転勤があり約8年間勤めた後、山口県にUターンして来ました。ゼネコンでは現場に4年・積算に4年携わりましたが、その経験が営業をしている今の私の職を支えていると言ってもいいでしょう。

卒業した1990年は、バブル景気で私たちもバブル組と社内で言われ浮かれその恩恵にかなり肖っていました。その時は、その後来る冬の時代を想像すらしていませんでした。今から考えると「おかしな時代」だったなと感じています。バブルと言う言葉が早く死語になってくれるよう、微力ながら社会の一員として自分が出来る責任を果たしていこうと思います。

建設業界に対する冬の時代も厳しいものでした。所得はもちろん下がり、リストラが始まりました。45歳以上対象でしたが、それを見た若者もかなり会社を去りました。私もその中の一人です。毎週毎週、退職する社員が挨拶に来ました。「長い間お世話になりました。お互いがんばりましょう。」その言葉を何十回聞いたのでしょうか、辛い日々でした。共に苦労した同士が居なくなるので

す。社内の雰囲気も暗くなり活気がなくなりました。私が退職した時、上司の方が言っていました。「辞めるのも辛いが残るものも辛い」もうこんな思いをしたく有りません。

ここ最近、日本の景気が少し上向いて来ていますが、建設業（特に地方の建設業）はまだまだ不況のトンネルの中を手探りで歩いています。この実情を打開する為にも、今のタイミングで変わらなければいつ変わるのでしょうか。社会で一生懸命働いている方はお判りになるとと思いますが、タイミング・バランスは仕事を進める上でかなり重要です。有名学校を卒業したから、その感受性が有るとは限りません。私たち企業人は、そのような感受性を備え、会社に利益をもたらして行く事を宿命として受け入れなければならないのでしょうか。

【現状と今後】

最近の建設事情は、民間の設備投資もあり建築において受注は伸びていますが価格競争がまだ激しく利益に繋がっていません。土木はご存知の通り毎年の国の公共事業費削減・御役所による単価及び経費の見直しにより受注・利益共々下がり続ける一方です。また一部の悪意の有る企業により、一次下請けへの一括発注禁止・リサイクル法の改正などから取り巻く環境は厳しさを増すばかりです。このような事から今後はスクラップアンドビルト（古くなったものを廃棄し新しいものに作り変える事）の時代は終わり、金融界でよく使われていた言葉ですが社会資本のアセットマネジメント（アセット=資産、マネジメント=管理・運用）の時代に入ろうとしています。簡単に言えば長く続いた新設の時代は終わり補修の時代になると言う事です。国土交通省によると、2030年に新規発注額を補修額が上まわると試算されています。私は今、土木営業をしています。営業においても変化の時が来ていまして、仕事を待つ時代からmake business styleの時代に入ろうとしており、提案形の営業やPFI（民間の資本を利用した社会資本整備）などに切り変わろうとしています。その為、それが出来ない企業は淘汰されて行くと言う事です。

冒頭で私が今、この年でなぜ高専に通っているかと書いていましたが、私が所属している会社の土木部の受注を少しでも上げたいという思いから社内で企画書を提出したところ、進めて見ようと言うことになり、それを開発すべく田村先生に研究を依頼させて頂きました。これは先ほど述べた補修時代に備える為、土木分野におけるコンクリート構造物の補修工法として、宇部市に本社を置く(株)エムピーエスが建築で使用している技術を土木分野で確立させようとするものです。よって3者の共同研究としてH17年11月にスタートしました。

この取り組みは、私自身にとっても意義のある事で、自分から組織の中でアクションを積極的に起こしたのは初めてです。仕事に対するスタンスを確立する年になり、自分のスキルを確かめ見直し今後、仕事で幾多かある試練に自信をつけ臨みたいと決意しました。

今回、この共同研究を快く引き受けて頂いた田村先生には大変感謝しています。最近では産官学のコンソーシアムが盛んに行われるようになり、またそれに対する沢山の種類の助成金が出ています。是非、何かアクションを起こしたい、起こすと言う方があれば高専の先生方に相談してみてもどうでしょうか。気軽に相談でき、ムリも聞き入れてくれ親身に成って共に考えてくれます。やはり母校はいいものです。



徳山高専での実験風景



お別れにあたって

一般科目 教授
和田 實



この3月で定年退職することになりました。

校長をはじめ教職員および学生の皆さんのお陰をもちまして、無事に定年を迎えることが出来たことを心から感謝しております。

私が徳山高専に勤め始めたのは、昭和50年（1975年）の4月からで、31年間を迎えるところです。その年は、広島カープが初優勝した年で最も忘れられない年であった気がします。あれから31年、今思えば、着任1年目から寮務主事補、クラス担任、学生主事補、教務主事補、その後に寮務主事、学生主事および一般科目主任を務めさせていただきました。この間、本学や学生たちに何ができたのだろうか、反省の毎日だったように思います。



その中で思い返されますことは、体育教師として、2代目の福岡校長の時代、クラブのあり方検討委員会で、校長の掲げたクラブ活動の四原則について熱心にクラブ活動に取り組んでおられる先生方と共に校長室で議論を続けました。学生、教員へのアンケートを行い、さらにシンポジウムを開催し、クラブ活動を学業とともに、教育に

欠かせない両輪として位置づけ、推進してきました。その結果、クラブ活動の日の定着化がなされ、クラブ活動の指導マニュアルも作成できました。私の指導した陸上部では、5000mで全国大会1、2位を2年連続で達成するなど、多くの成果も出てきました。現在は、教育維新と言われるように、先生方の校務も多く、なかなか学生たちを直接指導する時間が少なくなっていることを危惧しておりますが、徳山高専のよき伝統の中にある教育の真髄は継承してほしいと願っております。

今高専・大学等は独立行政法人となり、少子化、景気回復の遅れなどの大きな逆風の中、生き残りをかけての厳しい競争の中に立たされていますが、徳山高専のますますのご発展を祈りつつ筆をおきます。

在職中、多くの方々に大変お世話になりました。ありがとうございました。



にっぽんむかしばなし（周防編）



事務部長
野中 章彦

（常田富士男の語り調で読んでください。）

むか～しむかしのことじゃった。周防の国は「徳山」ちゅうところに「久米」と呼ばれちよった集落があったそうな。

「久米」の由来は定かじゃあないが、もともとこの地は山あいの小さな集落で、田んぼも猫の額ほどのようなものばかり。米の収穫も僅かであったらしゅうて、「米に苦しむところ」、つまり「苦米」が「久米」ちゅうようになったんじゃと。（筆者の創作（空想）です。念のため。）

それは兎も角、そこの小高い丘にやあ二つの塾があつてな、それぞれ「高城塾（上の塾）」「栗迫塾（下の塾）」と呼ばれちよつての、上の塾じゃあ15歳のものが20歳位まで、下の塾じゃあ18歳のものが22歳の頃まで学び、共にそこそこの賑わいを見せちよつたそうな。

そんなある時、上の塾にお江戸の方から若うて“ぶち”元気のええ塾長さんがみえられての、あれやこれやと新しい手ほどきを次々に始められたんじゃと。

それから約3年経った頃じゃった。上の塾長さんが下の塾長さんに「お互い協力し合うてやらんかいの～」と呼びかけられて、塾生同志が相互に行き来したり、互いに手ほどきを受け合うことなど、いろんなことをやっていったそうな。

そのうち、「お互いの地名を一つにして“塾苑台”ちゅうようにしちあどうじゃるか」ちゅうことになっての～、ある日、塾長さん達が時の領主様に陳情に行きなさつたそうな。

それから幾月か後に、領主様から「その方らの要望を叶えてつかわす。共に励めよ！」ちゅう有難～いお達しが来たそうな。このことも大きな支えになって互いの協力はますます強うなつての、それぞれの塾もどんと栄え、その名声は当地はおろか、周辺の国々、果てはにっぽん全国津々浦々まで知れ渡るようになったんじゃと。

時は移り変わり、この二つの塾は、それぞれ「徳山高専」、「徳山大学」ちゅう立派な学校となつての、地名も「学園台」と呼ばれるようになって、後々までも“ごっぽう”栄えていったそうな。めでたし！めでたし！



（以下は普通に読んでください。）

筆者、昭和55年から58年までの3年間、平成15年から18年までの3年間と二度にわたり本校で勤めさせていただき、皆様方には大変お世話になりました。

最初の任期中には会計検査院の検査受審・事後処理等々、そして最後の任期中には、法人化という大転換期に直面すると共に、J A B E E、認証評価（試行）専攻科の各審査や様々なことに対処させていただきましたが、何れも皆様方の多大なご協力のお陰をもちまして、何とかここまで無難に乗り越えることができました。ここに、改めまして厚く御礼申し上げます。また、事務部長としての職責を十分に果たし得なかったことに対しましては、深くお詫び申し上げます。

前記「むかしばなし」の結末の如く、本校がますますご発展されますことと、皆様方のご健勝・ご多幸を心からお祈り申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

新任者紹介



よろしくお願ひします



機械電気工学科
フィッシャー クルト
助教 飛車 来人

ご出身はどちらですか？

ドイツ西部、オランダ国境の近くのクレベという町です。ここで私は高校卒業まで暮らしました。方言はオランダ語に似ています。

最も近くの大都市は、2000年の歴史を持つナイメーヘン市でオランダの古い町です。

本校にこられる前はどちらに？

スイス連邦工科大学チューリッヒ校を卒業した後、ドレスデンの複合システム・マックス・プランク研究所、東京大学、三菱総研とエンジニアリングソフトの会社で研究しました。

徳山高専の印象は？

学生の「知りたい」、「習いたい」などの向学心が強いと思います。

ただ、授業の説明時に「理解できた」、「疑問がある」、「理解していない」などの反応がもっと欲しいです。

ご家族は？

妻と二人で暮らしています。

ご趣味はなんですか？

水泳、スキューバダイビング、温泉

今後の抱負をお聞かせください。

本の執筆と重力や液体シミュレーションの研究をすすめたいです。



機械電気工学科
もりさき てつや
助手 森崎 哲也

ご出身はどちらですか？

山口県吉敷郡阿知須町です。今は合併して山口市になりました。

本校にこられる前はどちらに？

宇部高専を卒業後、福井に行きました。この頃の影響で今でも福井弁がでます。関西弁っぽいですが実は違います。その後川崎市の会社に就職して2年くらい働きましたが高専教員を志し、退職をして山口大学で学位をとりました。それから半年ほど研究員をして徳山高専にやってきました。

徳山高専の印象は？

自分が宇部高専の学生だった頃から徳山高専は「優秀な学生が集まっている」というだけでなく、優れた教員によって鍛え上げられている」といった印象をもっています。

ご家族は？

未婚です。

ご趣味はなんですか？

旅と音楽です。旅はあまり計画をたてずにフラッと出ます。何日かかけて温泉を目的に出かけることもあります。帰ってくると余計に疲れていることばかりです。音楽は自分で作って録音したりもします。演奏の方はいろいろな楽器に手を出してきました。しかし、どれもあまり上手くありません。

今後の抱負をお聞かせください。

学生の役にたつことが自分の使命だと思っています。そのための努力を常に惜しまない教員でありたいと思っています。



一般科目
さいとう かずひこ
助教授 齊藤 一彦

ご出身はどちらですか？

地元、山口県周南市です。櫛ヶ浜保育園、櫛ヶ浜小学校、太華中学校、徳山高専の出身です。

本校にこられる前はどちらに？

広島大学で研究員をしながら、広島県内のいくつかの大学で非常勤講師をしておりました。

徳山高専の印象は？

緑に囲まれ、校舎からの眺めも素晴らしく、毎日この環境に感謝しています。また、大学と比べると規則などは厳しく、高校と比べると自由な雰囲気、まさに高校と大学の中間的な独自の雰囲気がある学校だなと思いました。

ご家族は？

今のところ妻のみです。

ご趣味はなんですか？

ピアノを弾くこと

気になったこと（たいていは非実用的なこと）を徹底的に調べること

今後の抱負をお聞かせください。

早く仕事にも慣れ、少しでも徳山高専のお役にたてるよう、精一杯頑張りたいと思います。また、自分を育ててくれたふるさと、周南市に少しでも恩返しができるよう、地域貢献にも努力していきたいと思っています。



そら としお
学生課長 空 俊雄
(ハンドルネームはsky & salt です)

ご出身はどちらですか？

広島県佐伯郡八幡村という県西部の農村地帯で育ちました。その後、五日市町、広島市で暮らし（合併しただけですけど・・・）一応広島っ子ということに。

本校にこられる前はどちらに？

広島大学の中で三つのキャンパスをピンボールのように行ったり来たりで、最近は主に教務系を担当していました。

広大に興味のある人は、いつでも相談に来て下さいね。

徳山高専の印象は？

景色の良い所ですが、高専坂は1ヶ月でギブアップしました。高専には、高校生・短大生・大学生レベルのいろんな年代の学生がいて、高・大連携を一つのキャンパスでやっているのがとてもユニークで、大学とは異質のエネルギーを感じます。

(CM: ルールを守って楽しい学生生活を。ゴミの減量と分別もよろしく。これからの技術者は、環境にも配慮しな！...)

ご家族は？

周南・広島・神戸合わせて五人家族です。親の代から4世代ずっと男系の一族で、昨年までは娘代わりの猫(19才没)が居ました。

ご趣味はなんですか？

猫の観察とバイクと鉄道模型。夏は市営プール、冬場は中国山地の林道ドライブを楽しんでいます。夢は、パラグライダーで散歩することです。バイクではこれまで3回事故に遭いました(生きてて良かった)。皆さんも気をつけて下さいね。

今後の抱負をお聞かせください。

自己分析では、アバウトな性格なのに人見知りするタイプ。そのせいか1年近く経つのに、学生の皆さんとあまり話す機会がありませんが、高専を卒業するまでに一人でも多くの人の顔と名前を覚えて、サポートできるようになりたいと思います。

急に吠えたり噛みついてはしませんから、安心して近寄ってもらって大丈夫です。

抽象的ですが、今後、いろんな場面で高専の潤滑油的な役割が果たせるように努めたいと思いますので、よろしくお願ひします。



パワードパラグライダーによる撮影 H17.10.25